教の噂をしたからである。丁度九州征伐で夫の留守中、彼岸の寺まいりにかこつけて侍女たちの群に混って宣教師館を訪れた。偶然その日は復活祭日で、会堂が美しく飾ってあった。その時、名を明かさずに説教を乞い、イルマンのコスメの説教を長時間に亘って聞いたのである。コスメと激しい討論を戦わせたのはこの時であった。コスメはこれほど物の解る婦人を日本で見たことがないと云った。それが始まりで、その後侍女を介して説教を聞き質問を続けていたが、その侍女が先ず洗礼を受けてマリアとなった。続いて邸内の主立った婦人十七人が洗礼を受け、残るのは夫人のみになった。その頃に秀吉の宣教師追放令が出たのである。それは夫人を一層熱心にさせた。神父の出発前に洗礼を受けるため、駕籠に乗って会堂へ忍んで行こう、そう彼女は決心した。神父セスペデスは、時期が時期だけに、それを危んで止めた。そうして、マリアに教えて夫人に洗礼を授けさせた。それがガラシヤ夫人である。だから夫人の信仰は初めから殉教の覚悟と結びついていた。

そのように追放令は却って信仰の情熱を高めた。そこで平戸に集まった宣教師たちは、殉教の覚悟を以て全部日本に留まることを決議した。そうしてポルトガル船長をして秀吉の許に次のように報告させた。日本にいる宣教師は数が多く、到底全部を運ぶことが出来ない。従って本年は船に収容し得るだけを運び、あとは明年に延ばすことにする、と。その収容し得たのは、シナへ叙品を受けに行くイルマン三人のみであった。

こうしてヤソ会士は潜伏戦術に出た。その潜伏をひき受けたのはキリシタンの領主である。有馬晴信は全部引き受けようと申出たが、しかしほかの領主へも分けざるを得なかった。オルガンチノとイルマン二人が小西行長の領内に留まったほか、あとは西北九州である。度島に四人。大村領内に十二人。豊後に五人。天草島に六人。大矢野に三人。五島に二人。筑後に二人。有馬は最も多く、七十余人の宣教師と七十三人のセミナリヨの少年をひき受けた。

この潜伏戦術は殉教の覚悟に裏打ちされているのではあるが、しかし秀吉の追放令はやがて緩和されるであろうという見とおしをも伴っていたのである。そうしてそれは見当違いでもなかった。秀吉は宣教師たちが社会の表面から影をひそめ、彼の威光に恐れて萎縮している態度を示している限り、強いて追放令の厳格な実施を迫りはしなかった。従って潜伏戦術はキリシタン信仰の維持という見地から見れば成功だったとも云える。それはただに信者たちの信仰を維持し得たのみならず、更にそれを内面化し深化することによって著しい信仰の発展をさえもたらし得たのである。しかしその代償としてキリスト教が公共的性格を失

ったことは十分重視して置かなくてはならぬ。公的な意味においてはヤソ会の宣教師は日本から追放されて一人も残っていないのである。このことは間もなく重大な結果を現わしてくる。

四 キリシタン迫害史

秀吉の宣教師追放令によって日本のキリシタンの信仰は揺ぎはしなかった。平然として領地を捨てた高山右近の態度は、数多くのキリシタン武士に通有の態度であった。黒田孝高に勧められて洗礼を受けた大友義統が、追放令の出たあとで早速迫害を始めたのは、むしろ異例に属するのである。しかしそれにしてもこの追放令がはっきりと一つの時期を劃することは認めざるを得ない。追放令の出るすぐ前に大村純忠、大友宗麟が相次いで死んだ。その年の末には、日本人イルマン中の傑物ダミヤンが四十四歳で死に、三年の後には、クエリヨも死んだ。シャビエルに見出されて以来、実質的には日本伝道史の上に巨大な仕事を残した琵琶法師のロレンソも、やや遅れて五年後に六十六歳で死んでいる。九州諸地方の開拓に大きい働きをしたルイス・ダルメイダは、追放令に先立つこと四年、六十歳で、その三十年に近い活動を終った。それやこれやを思うと、ここに世代の変り目があったともいえるのである。

追放令が出てから三年後、一五九〇年七月にワリニャーニは、ローマへの少年使節を伴って帰って来た。少年使節たちはヨーロッパの服装がすっかり身についた青年になっていた。がそれを迎える日本の情勢もすっかり変っていたのである。ワリニャーニはヤソ会の巡察使としてではなく、ポルトガルのインド副王の使節として、翌年秀吉に謁した。ヨーロッパを見て来た青年たちは、多くの大名や武士たちに取り巻かれて、その見聞を物語った。宣教師は追放しても、ヨーロッパ文明の摂取に対する一般の関心はまだ衰えていなかった。ワリニャーニは布教のことを全然表に出さず、外交家として活動した。それは信仰の情熱に燃えた人々にとってはまことに歯がゆい態度であったが、しかしワリニャーニは今こそ忍耐の時であると見ていたのである。

かくてワリニャーニは潜伏の戦術に積極的な内容を与えた。信者たちは公然たる会堂や儀式を持たずともその信仰を維持し得るように「組織」されなくてはならぬ。セミナリヨやコレジヨは人目に立たない山中や島に隠されなくてはならぬ。教えをひそかに人の心に植えつけるためには教義書がどしどし印刷されなくてはならぬ。ローマから帰って来た四人の青年は天草のコレジヨで教え始めた。ワリニャーニの携えて来た印刷機は長崎で、後には天草で、盛ん

に動き始めた。こうして実質的にヨーロッパの文化が沁み込んで来れば、やがて教会が公共的な性格を取り戻したときに、大きい飛躍が可能となるであろう。これが一五九一年の末にワリニャーニの日本に残して行った方針であった。

しかしこの忍耐強い、地味なやり方は、スペイン人のフランシスコ会の進出によってかき乱されたのである。

スペイン人がフィリッピン諸島を確保し、太平洋航路を打開したのは、ポルトガル人のゴアやマラッカの確保よりも三四十年ずつ遅れていた。従ってスペイン人の日本への進出も、丁度それ位は遅れている。ルソンの商船が平戸に入り、スペイン人が初めて日本の地を蹈んだのは、信長の死後二年を経た一五八四年である。その後漸次接触が出来、一五九一年には原田孫七郎がルソンへ秀吉の勧降状を持って行った。翌年ドミニコ会の宣教師がその真偽を正すために日本に来て、肥前の名護屋で秀吉に謁し、再び朝貢を促す秀吉の書状を持って帰った。しかるに、その船が帰途難破したために、更にその翌年にフランシスコ会の宣教師ペドロ・バプチスタが使節となり、一人の副使と三人のフランシスコ会士をつれて名護屋に来た。そうして副使が三度目の秀吉の書状を携えて帰ると共に、使節ほか三人は人質として残った。しかし宣教師たちはそれを在留許可と解し、京大坂方面に行くことを希望したのである。秀吉は布教しないという条件で許したが、宣教師たちはかまわずに布教を始めた。次の年一五九四年にまたフランシスコ会の宣教師三人が長官の返事をもたらして京都へ来た。返書は秀吉の注文にまるで嵌らないものであったが、しかしこれで宣教師は七人になった。

これらの宣教師が盛んに布教活動を始めたのである。一五九四年の秋には京都に会堂が出来た。翌年には病院が出来た。大坂にも会堂が出来た。長崎にもフランシスコ会士を常駐せしめた。これは四十年来日本の開拓に努力して来たヤソ会士にとっては、まことに不快な出来事と云わなくてはならない。ヤソ会は教皇から日本布教の独占権を与えられているのである。しかもその日本の布教は、目下忍耐を必要とする微妙な境遇に追い込まれている。拙く動くと根本的な失敗を招くであろう。しかるにフランシスコ会士は、ヤソ会と打合せるでもなく、ヤソ会士が潜伏している機会に、大っぴらに日本の布教事業を奪い取ろうとしたのである。ヤソ会士は憤らざるを得なかった。併しフランシスコ会士から見れば、日本のヤソ会士は秀吉の追放令によって悉く国外に逐われた筈である。即ち教皇の許した布教独占権は事実上消滅しているのである。フランシスコ会士

はヤソ会士のいない日本へ来て布教を始めたのであるから、抗議を受ける筈はない、この主張は屁理窟というほかないであろうが、しかしまた潜伏戦術の急所を射ぬいたものともいえるであろう。ヤソ会士は、抗議を持ち出すためには、おのれの追放令違反を白日の下に曝露しなくてはならない。この窮境に立って、彼らのフランシスコ会に対する憤懣は一層深まって行ったのである。

フランシスコ会士の無思慮な活動によって、日本布教は実に危険な瀬戸際に立たされていた。そこへ丁度二つの事件が一緒に起った。一つは一五九六年八月に最初の日本司教マルチネスが来着したこと、他は同年十月にスペイン船サン・フェリペ号が土佐の浦戸港に入ったことである。

日本に司教を置くことは、大分前から計画されていたが、フランシスコ会の攻勢を憤ったヤソ会は、それに対抗するため急いで実現したのであった。司教はローマ教会の制度であるから、会派の別なく指揮権を持つことができる。その司教にヤソ会士が任命せられれば、フランシスコ会士の活動をもヤソ会の方針に従って統制し得るのである。マルチネスはゴアで日本司教に就職し、七人の宣教師をつれてやって来た。そうして小西行長の斡旋により、インド副王の使節として、十一月に伏見で秀吉に謁した。

スペイン船サン・フェリペはマニラを発してメキシコへ向う途中、颱風で船を破損し、修繕のため浦戸へ入港したのであったが、船員の保護や修繕の許可を得るため使者を大坂に送った。その交渉が手間取っている間に秀吉は増田長盛を浦戸に急派して、積荷や船員の所持金を没収せしめた。その際サン・フェリペ号のパイロットは長盛に世界地図を見せ、スペイン領土の広大なことを誇った。長盛が、どうしてそんなに領土を拡張することが出来たかときくと、彼はそれに答えて、スペインでは先ず宣教師を送って土人にキリスト教を教える、ついで信者が相当数に達したとき、軍隊を送って、信者たちと呼応してその地を占領する、と答えた。このことを長盛が秀吉に報告した、とヤソ会側では主張している。しかしサン・フェリペ号の司令官の報告では、当時京都にいたポルトガル人たちが、秀吉に向ってスペイン人の侵略を説いたことになっている。スペイン人は海賊である。メキシコ、ペルー、フィリッピン諸島において残虐な侵略を行った。日本にも先ずフランシスコ会士を派して布教させ、ついでその国を測量する。そのために多額の資金をつぎ込んでいる。終局の目的は征服である。そう云ってスペイン人を讒したというのである。丁度その時にインド副王の使節、実は日本司教のマルチネスが来ていたのであるから、スペイン人のメキシコやペルーの征服のことを語らなかったとは保証出来ないであろう。

そういう事実をただ客観的に述べただけならば、讒言したとは云えないのであるが、しかしまだ世界的視圏を十分に獲得していない日本人にとっては、この事実を聞いただけで、在来の漠然とした杞憂が裏づけられるに十分であったであろう。キリシタン宣教師たちの企図は、性格において一向一揆に変りなく、その危険性においては一向一揆以上である。そう秀吉は確信したであろう。

一五九六年十二月九日（文禄五年十月廿日）弾圧がはじまった。フランシスコ会士六人、日本人ヤソ会士三人、その他日本人信者十七人が京都で捕縛され、京都、伏見、大坂、堺などで市中引き廻しに逢い、陸路を九州まで見せ物にして連れて行かれ、一五九七年二月五日、長崎の海岸の小山で死刑に処せられたのである。

これが日本における最初の大殉教であった。殉教者たちの不屈の態度といい、為政者側の「見せしめ」としての故意の残酷さといい、日本国中に与えた印象は実に激甚であった。信者の信仰は狂熱的になり、諸方の領主の圧迫もヒステリックな性格を持ちはじめた。

この年の夏、ルイス・フロイスは、六十五歳で日本における三十四年の活動を閉じたのである。その最後の報告は右の二十六殉教者のことであった。

翌一五九八年夏、新司教セルケイラが巡察使ワリニャーニと共に数人の宣教師をつれてやって来た。その一月あまり後に、教会の弾圧者秀吉も死んだ。

レオン・パジェスがその大部な『日本切支丹宗門史』（吉田小五郎訳岩波文庫）を丁度この年で以て始めているのは、彼の計画した日本史の第三巻がここから始まるからであって、日本におけるキリスト教の歴史をここから始めてよいと考えたわけではないであろうが、しかしまた「迫害」がキリスト教徒の完成に欠くべからざる条件であるという見地から見れば、日本のキリスト教史は、このあたりから真にキリスト教史になってくるともいえるであろう。しかし、ここで問題としているのは、キリスト教史ではなくして、日本民族が何故に世界的視圏を獲得し得ず、従って、近世の世界の仲間入りをなし得なかったかということである。この見地から見れば、この後の日本キリスト教史は、鎖国の形勢を激成して行く過程にほかならない。

勿論このことはキリシタンの運動が日本人の視圏を拡げるような要素を持たなかったということではない。秀吉死後の十数年間、即ち慶長年間には、舶来の印刷術のお蔭で、ローマ字綴りのキリシタン書が多数出版されたし、またキリシタン書以外にも語学書や文芸の書が出版されている。『日葡辞典』やロドリゲスの『日本文典』が出たのはこ

の頃であるし、『妙貞問答』や『舞の本』が出たのもそうである。日本側の舞の本などがほとんど仮名ばかりで書かれていた時代であるから、それをローマ字で綴っても、その移り行きは極めてなだらかで、大した困難もなくローマ字の採用が行われ得たのであった。これらの点から見れば、慶長年間はまだまだ広い世界への接近の傾向を持っていたと云えなくはないであろう。

しかしこれらはすべて「余勢」であって、隆盛期に張った根がいかに深くまた広く諸方に及んでいたかを示すに過ぎないのである。キリシタン側の文化的活動も著しかったに相違ないが、それに対抗する保守的な文化活動はさらに一層強力に押し進められていた。秀吉が下から盛り上ってくる力を抑えて、現状を固定させようとする方向に転じたとき、この大勢は定まったのである。家康はこの大勢に添い、それを完成して行ったのであって、その点で決して迷ってはいない。

しかし秀吉が貿易だけは保存しようとしたように、家康もまた西洋人との貿易には熱心であった。そうしてこの貿易を宣教師の布教運動から引き離すのが困難であることも知っていた。だから彼はキリスト教に対しては、初めから、公認はしないが大目に見る、という態度で一貫している。秀吉の死後、諸方で会堂や宣教師館が回復され、殊に小西行長の領地肥後では数多くの新設を見たのであったが、それらは問題にされなかった。だから秀吉死後の数年間には、信者が七万殖えたといわれる程である。

この形勢に最初の変化をもたらしたのは、一六〇〇年（慶長五年）の関ヶ原の戦である。それによって徳川の覇権が確立するとともに、小西行長、小早川秀秋などのキリシタン大名が亡んだ。特に小西行長の喪失はキリスト教にとって大きい打撃であった。しかしそれだけならばまだ大したことではない。キリシタン大名でも大村、有馬、黒田などは徳川方に附いていたし、徳川方の有力な諸大名、細川、前田、福島、浅野、蜂須賀などはキリシタンの同情者であった。重要なのはむしろキリシタン迫害が大名の間の主要な潮流となり、諸大名が漸次態度を変えるに至ったことである。迫害の先駆者は、小西行長の個人的な敵で、小西の領地を引きついだ法華信者加藤清正であった。彼の迫害によって肥後の八万の信者は二三年の間に二万に減ったといわれている。それについで迫害をはじめたのは、小西領であった天草島、長門の毛利などである。筑前の黒田孝高はその大勢に反抗してキリスト教を盛んにしていたが、一六〇四年に歿して長政が後を嗣いでからは、漸次形勢が変り、遂に長政の棄教を見るに至った。豊前の細川忠興も関ヶ原

戦の際に犠牲になったガラシャ夫人の思い出のためにキリシタンを保護していたが、それは十年以上は続かなかった。大村領は長崎が幕府の直轄地となった関係から直接に幕府の圧迫を受け、大村喜前（よしあき）は逸早く棄教した。ただ有馬晴信のみは夫人と共に熱心に信仰のために尽し、教勢の拡張を計っていたが、その彼も一六一二年には遂に流罪に処せられたのである。

しかし政治の表面に現われたこの大勢は必ずしもそのままキリスト教信者の間の大勢ではなかった。武装を解除された民衆が何を信じようと、それは初めの内はさほど問題ではなかった。だから宣教師たちも、公然たる宣教を控えつつ、内実において信者の組織に努力し、教育をすすめ、信仰書の出版を盛んにして、教勢の維持や拡張を計ったのである。その間、特に著しいのは日本司教セルケイラの活躍であった。彼は一方において布教事業の公認を再び獲得することに努めると共に、他方においてスペインの勢力との対抗、即ちフランシスコ会、ドミニコ会、アゴスチノ会などの進出を抑えることに苦心した。このスペイン側の宣教師たちは、一五九六年の大殉教にもひるまず、依然として日本進出に努力し、一六〇二年の如きは、マニラから渡来するもの十五人に達したのである。セルケイラはその年の秋マニラに書簡を送って、このような行動がいかに危険であるかを警告している。第一、家康はキリスト教を好まず、仏教に熱心である。貿易の必要から宣教師の滞在を大目に見ているが、公認しているのではない。第二、家康初め諸大名はスペイン人が侵略者であり、布教は侵略の手段に過ぎぬと信じている。これらの理由によって、スペイン宣教師の大挙来日は、教会に対する迫害を激発する怖れがある。その徴候はすでに顕著だといってよい。家康は宣教師の到着に関して、「あいつらはまたはりつけになりたくて来たのか」と云ったという。側近の高僧（相国寺の承兌）の策動で、毛利の山口、細川の小倉、黒田の博多などには、すでに迫害が起り、或はまさに起ろうとしている。この調子で行くと大殉教のようなことがまた起らないとも限らない。だからスペイン宣教師の無思慮な行動は実に危険である、というのであった。

セルケイラの態度は、出来るだけ控え目にしていて家康以下諸大名の疑念を解き、布教公認を取り戻そうというのであって、巡察使ワリニャーニと相談して立てた方針を守っているのである。ワリニャーニがセルケイラたちと共に三度目に日本を訪れたのは一五九八年の夏であって、着くと間もなく秀吉が死んだのであるが、その死に先立って先ず着手したのは奴隷売買問題の解決であった。この問題は秀吉の追放令の中で最も手ひどく教会にこたえたものであ

る。追放令発布の当時クエリヨは、日本人が売るから悪い、そちらで禁止したら好かろうと秀吉に答えたのであったが、ワリニャーニとセルケイラとは、ポルトガル商人に奴隷売買を禁ずる態度を明かにしたのである。この禁令は最初の日本司教マルチネスが既に着手していたが、まだ実現されずにあったのである。これはキリスト教徒としては当然の態度であるが、しかしポルトガル商人の利益を制限する意味において、相当困難な仕事であった。それだけに追放令緩和に役立つ筈でもあった。ついで秀吉の死後には、ワリニャーニは、以前大坂にいたロドリゲスを連れて、禁圧緩和の運動に大坂へ出たりなどした。諸大名には同情者もあり、うまく行くように見えていたが、そのうち関ケ原の戦争が起り、小西行長の滅亡その他事情の変化で、問題は非常にデリケートになっていた。丁度そこをスペインの宣教師たちが掻き廻し始めたのである。ワリニャーニはその頃に日本を去ったらしいが、セルケイラはこのワリニャーニの忍耐強い宥和政策を受けついだのであった。

一六〇六年にセルケイラは伏見に来て家康に謁した。ポルトガルの使節という資格であるから、旅行は公式であったし、謁見式も公式であった。しかし実質的にはセルケイラは、司教の正装で家康に会い、司教として信者たちに接した。また近侍の本多正純や京都所司代の板倉勝重には、布教の自由についていろいろと懇請したらしい。翌年にも管区長パエスを駿府に送って同じように運動を続けている。パエスは江戸にも行って将軍秀忠に謁した。本多正信正純父子が親切に世話をした。布教の公認についても何となく希望があるように見えていた。

このセルケイラの方針をいつも脅かしていたのはスペインの宣教師たちであったが、しかしそのほかにもう一つ手ごわい敵が現われて来たことを見のがしてはならない。それは新教国民たるオランダ人とイギリス人とである。

ヨーロッパを真二つに分裂させた宗教改革は、十七世紀の初めにはますます深刻な影響を現わしていた。信仰の自由を守るために北アメリカに移って行くピューリタンたちがもうそろそろ動き出しそうになっていた頃である。新教と旧教との対立が織り混って、あの執拗な抗争を続けた三十年戦争も、もう萌し始めていた。新大陸の発見以来急激に興隆した旧教国スペインは、一五八八年の無敵艦隊敗滅以来、ヨーロッパの覇権への望を捨てて降り坂になった。それとともに、ローマ教会と絶って新教に妥協したイギリスが、海上の雄者になって来た。新教を容れたオランダは、その前からスペイン王に離反して独立のために戦っていたが、今やその独立を殆んど完成しようとし、イギリス

に対抗し得る海国となった。このヨーロッパの形成は、間もなく東洋の海上へ響いて来たのである。

その最初の現われは、一六〇〇年四月、豊後に漂着したオランダ船リーフデ号であった。初めは五隻の艦隊の内の一隻であり、百十人の乗組員を持っていたのであるが、途中散々な目に逢って、生存船員僅か二十四人で、ただ一隻豊後に着いたのである。しかも歩けるのはパイロットのイギリス人ウィリアム・アダムス以下六人だけで、三人は上陸の翌日死んだ。オランダが遠征艦隊を出し始めてからやっと五年目、東インド会社が出来る二年前のことであるから、まだ東洋への航海は不慣れだったのである。

アダムスが大坂城で家康に会ったのはヨーロッパの旧暦五月十二日（慶長五年四月十日）で、関ヶ原役の五カ月前であった。家康はアダムスからオランダの独立戦争の事や、マゼラン海峡を通過し太平洋を横ぎる世界航路の事を聞いたのであるが、これまで旧教の宣教師ばかりを見ていた家康の眼には、この俗人の航海者がよほど違って見えたであろう。彼はリーフデ号を浦賀に回航させ、アダムスに俸給を与えて好遇した。その結果五六年後にはオランダの東インド会社と連絡を取ることが出来、一六〇九年七月、二艘のオランダ船が平戸に入港するに至ったのである。そこで両船の商人頭が使節として駿府に行き、オランダのオレンヂ公の書簡を家康に呈した。家康は通航免許状を与え、また商館の設置を許した。商館設立のこともまた、家康には在来の宣教師のやり方と異なって見えた点であろう。その秋には平戸にオランダの商館が出来、ジャックス・スペックスが商館長として数人の館員と共に駐在することになった。

こうしていよいよ、オランダ貿易が始まったのであるが、半世紀以上に亘るポルトガル人の貿易や、最近にマニラから日本に進出して最も地の利を得ているスペイン人の貿易などと競争するのは容易でなかった。スペックスは非常に努力して、二年後の一六一一年七月に自分の手で第二船を入れ、アダムスと打合せて駿府に行った。スペインやポルトガルの使節もその少し前に駿府を訪れたのであるから、云わば三国は鎬を削るという状態になっていた。しかるにオランダ商館長スペックスのみは、アダムスの斡旋で、まるで別格の取扱いを受け、家康と親しく貿易の話をすることが出来たのである。スペックスはそのあとで江戸に出で、浦賀に廻ったが、そこでスペインの使節と落ち合ったにかかわらず、いずれも会おうとはしなかった。本国の敵対関係がここまで響いていたのである。

こういう競争に際して、スペイン人やポルトガル人は、オランダ人が叛逆者であり海賊であることを攻撃した。オランダがスペインからの独立のために戦っていたこと、海

上で敵船の捕獲や掠奪をやっていたことは、いずれも事実である。それに対してオランダ人や家康側近のイギリス人アダムスが、過去一世紀に亘るポルトガル人やスペイン人のインド及びアメリカにおける残虐な征服行為を挙げて対抗したことも、推測するに難くない。ポルトガル人及びスペイン人は世界的視圏を開くという非常な功績を挙げたのではあるが、その点を抑えてただただ暗い半面のみを物語れば、そういう事実の報告のみを以てしても、ポルトガル人とスペイン人とを日本から遠ざけることは出来たのである。

このやり方はやがて公的な表現にまで達している。一六一二年八月にオランダから来た船の商人頭ヘンドリック・ブルーワーは、国主モーリッツの書簡を携えて駿府に行ったのであるが、その書簡には、ヤソ会の宣教師が表に布教を装いつつ、内実においては改宗による国民の分裂、党争、内乱をねらっている、と明白に認めているのである。これはもう個人的な蔭口ではない。反動改革者に対する新教徒の公然たる攻撃なのである。

この趨勢を心から憂えていたのは、セルケイラであった。彼はスペイン国王に対してオランダ人の危険を頻りに訴えている。またオランダ人の策動を有効ならしめるようなスペイン宣教師の無思慮な行動をも訴えている。しかしもう遅かった。迫害はすでに一六一二年の春、家康の膝下駿府において始められたのである。

一六一二年四月（慶長十七年三月）家康は京都所司代板倉勝重にキリスト教会堂の破却を命ずると共に、駿府の旗下武士のうちの信者十数人を検挙した。検挙はなお夏まで続き、大奥の女中にまで及んだ。この禁教令は有馬晴信の処刑と連絡があるらしく、発布の直前に晴信の喧嘩相手岡本大八が火刑に処せられたし、また駿府での検挙と同時に有馬領での禁教が励行された。

一六一三年、江戸で、キリシタンの検挙が行われた。スペイン宣教師の経営していた浅草の癩病院も閉ざされた。七月に至って、検挙せられたものの内二十七人が死刑に処せられた。四五年来メキシコ通商のことで幕府の役人との間に山師的に活動していたフランシスコ会士ルイス・ソテロも、この時には信者と共に捕えられていたのであるが、巧みに出獄して伊達政宗に取り入り、この年の十月には支倉常長たちをつれて日本を出発した。がこれもソテロの山師的な計画によるものであって、日本における大きい社会的情勢の現われではなかった。

一六一四年一月二十八日（慶長十八年十二月十九日）家康はキリスト教厳禁、宣教師追放の政策を決定し、大久保忠隣をその追放

使に任じた。家康のこの決定には南禅寺金地院崇伝の進言が有力に働いているといわれる。しかし、数日後に発表された崇伝の禁教趣意書は、厳めしい漢文で長々と書かれてはいるが、「キリシタンは神敵仏敵である。急いで禁圧しなければ国家に害があるだろう」ということを主張しているだけである。何故特にこの際追放令を出す必要があるか、キリスト教のどの点が国家を害するか、などについては、何事も語っていない。その与える印象は、宗派的な偏執と陰惨な憎悪とのみである。即ち家康の頭脳としての崇伝自身が、すでにキリシタンを説得しようとする理性的な態度を持っていないのである。従って禁教がただ武力による圧迫となったのは当然といわなくてはならぬ。

大久保忠隣は二月二十五日（慶長十九年一月十七日）に京都に着き、翌日から会堂の焼却・破壊、信者の捕縛、転宗の強要などを始めた。棄教転宗を肯んじないものは、俵に入れてころべころべと囃しながら転がして歩いた。女の信者に対しては裸体で晒らすこと、遊女にすることなどで脅かした。さらに頑固なものは火刑にするといって、四条河原に十字架を建て列ねた。京都の町は陰惨な空気に包まれてしまったのである。

しかしこの狂気じみた迫害は長くは続かなかった。二月二十七日には大久保忠隣自身が領地没収の宣告を受け、その命令が三月十日に京都に着いたのである。そこで跡始末は賢明な京都所司代板倉勝重によってなされたのであるが、勝重はその前からすでに追放や流罪の穏やかな策を立て、外国人宣教師に対しては大久保が京都に着くよりも二週間前に退京を命じ、伏見、大坂にいた人々と併せて、船で長崎の方へ送り出したのであった。従って残る問題は、日本人信者で改宗を肯んじないものの追放である。加賀の前田家に預けられていた高山右近の一群、内藤ジョアンの一群などは、四月十五日に加賀を立って、京都でジョアンの妹のジュリヤたちの群と合して長崎に向った。日本にいなければよいので、殺す必要はないではないか、というのが勝重の方針であった。

長崎へは諸方の追放者が集まり、だんだん感情が激して受難覚悟の行列なども繰り返されたが、幕府の官吏は諸大名の兵を集めて厳戒しつつ、会堂の破壊焼打ちを断行し、十一月に至って四百余人のキリシタンを海外に送り出した。高山右近はマニラで翌年死んだが、内藤兄妹はなお十二三年生きていた。

この大追放は、しかし、キリシタン宣教師の三分の二を国外に送り出し得たに過ぎなかった。潜伏し残った宣教師は、諸会派併せて四十数人に達している。しかも翌年からしてすでに潜入帰来が始まっているのである。

右の大追放の際に、九州の諸大名は特に厳重に禁教を実行する様命ぜられた。中でも、大村、細川、黒田などは、よほど熱心に努力しなくてはならなかった。しかし残虐な処刑はまだ行われていない。ただ一つの例外は有馬領である。幕府は、棄教した領主直純を日向に移したが、家臣の殆んど全部はキリシタンで、棄教した領主に附いて行こうとせず、浪人してもとの土地に留まった。このキリシタンの態度が新領主を恐れさせたのみならずまた幕府をも驚かせた。そこで大追放断行のために長崎に集まっていた陣容と兵力とを用いて、徹底的なキリシタン探策、残忍な拷問や処刑を行ったのであった。つまり有馬の家臣らの固い信仰、強い操守が、迫害の残虐化を誘発したのである。

この関係はこの後の迫害史に一層拡大されて現われてくる。大追放でキリシタンを断絶し得たと見えたのはただ表面だけのことで、殉教を恐れない宣教師はなお多数潜伏している。それに加えて毎年勇敢な潜入者が続々とやってくる。幕府を最も強く刺戟したのはこの潜入であった。それも初めの内はおもにヤソ会士で、単独に、隙をねらって潜入したのであったが、一六一八年頃から、ヤソ会以外の宣教師たちが、団体的、計画的に潜入するようになったのである。それは前の年に大村で殉教した二人の宣教師の話が、マニラのスペイン人たちの間に殉教熱を煽ったからであった。第一回は七人、翌年の第二回は五人。ついで一六二〇年の第三回は、人数はただ二人であったが、その引き起した事件によって当局の注目をひいた。アゴスチノ会のズニガとドミニコ会のフロレスとで、堺のキリシタン平山常陳の船に隠れて日本へ潜入する途中イギリス船に捕獲され、オランダ船に引渡されて平戸へ連れて来られたのである。オランダ人はこの捕獲が海賊行為でないことを立証するために、乗員中に宣教師がいることを主張した。しかし、ズニガとフロレスとは宣教師でないと云い張った。そこで面倒な係争問題が起ったのである。オランダ人はその立場を守るために、二人に残忍な拷問をも加えたらしい。この争は長崎奉行の前でスペイン人とオランダ人が互に非難し合うという場面をも展開した。スペイン人はオランダ人の叛逆と海賊行為とを指摘し、オランダ人はスペイン人のペルーやメキシコの征服を指摘した。が結局先ずズニガが自白し、それを潜入させた罪で船長平山常陳以下船員十数名が投獄され、最後にフロレスも自白した。彼らが長崎で処刑されたのは一六二二年の八月である。

マニラからの潜入はまだこの後にも続々として行われたのであるが、しかし右の処刑の頃までに既に十分にキリシタン迫害への拍車の効用を発揮していた。宣教師の潜入

は、直接にはそれを助ける外国航路船やその船員の取締りを厳格ならしめたが、同時に日本に潜入している宣教師との連絡や、彼らをかくまい潜伏せしめる国内信者の存在をも曝露したのである。そこで、この刺戟がなければ穏やかに秘やかに存在し続けることの出来たかも知れない信者たちを、洗い立て、検挙し、処刑するという気運が生じて来たのである。

その最初の現われは、マニラからの第一回潜入のあった翌年、一六一九年（元和五年）の京都における大殉教であった。家康死後三年であるが、金地院崇伝の勢力は依然として盛んであった。出来るだけ温和な取扱いをしようとしていた板倉勝重も、遂にその力に押されて、富豪桔梗屋ジョアンの一家を初め、信者六十三人を逮捕したのである。そうして刑の軽減の努力も効なく、この年の十月初めに、将軍の命によって、獄死を脱れた男女小児五十二人を七条河原で火刑に処した。

次に著しいのは、一六二二年の長崎立山の大殉教である。一六一八年の秋以来、マニラからの潜入者及びその連累が続々と捕えられ、宣教師格のものは壱岐や大村の牢獄に、宿主や五人組の連坐者は長崎の牢獄に繋がれた。獄死したものも多かったが、後者の内には次々に殺されたものもあった。しかしそれでも入牢者はだんだん殖えて行ったのである。その処分が一六二二年の夏頃から行われたのであった。前述のズニガ、フロレス、平山船長の三人が火刑、船員十名乗客二名が斬罪に処せられたのは、八月十九日であったが、ついで九月十日（元和八年八月五日）に、数年来たまっていた宣教師及び信者五十五人が、長崎の立山で、火刑と斬罪に処せられた。これが「大殉教」と呼ばれるものである。しかし処刑はそれで終らず、二日後に、宣教師など十八人が大村の山中の人里離れた所で刑の執行を受け、つづいて長崎附近の諸処で、同様の処刑が続行された。全体では百数十人に達するであろう。

ついで一六二三年、家光が将軍となった年には、江戸で、原主水、ヤソ会のアンゼリス、フランシスコ会のガルベス以下五十人のキリシタンが、悉く火刑に処せられた。少しあとでそれらの人の妻子など二十六人（或は四十三人）が同じく火あぶりになった。なおこの年には仙台でも三十六人処刑されたらしい。

翌一六二四年には東北地方の迫害が続き、仙台と秋田とで多数のキリシタンが処刑された。

一六二六年は、家光の政策が長崎へ響いて来た年である。ヤソ会の宣教師九人の火刑を初めとして、有馬における残忍を極めた拷問苛責が開始された。温泉岳（うんぜん）の火口がそのために用いられた。熱湯に浸して苦しめるのである。が

殉教者たちは、その苦しみを見せつけられても、退転しようとはしなかった。最も猛烈であったのは二年位であるが、しかしこの残忍な方法は一六三一年までは続けられたのである。それは思想や信仰の力に対する、武力のヒステリーだといってよい。

一六二九年頃から東北の方でまた迫害が烈しくなっているが、長崎の方でも一六三三年には、多数の宣教師や信者が「穴つるし」にされた。連年の多量な火あぶりがまだ手ぬるく感ぜられて来たのであろう。

五　鎖　国

宣教師追放令を出した秀吉も、禁教令を発布した家康も、鎖国を考えていたわけではなかった。秀吉の追放令には貿易の自由をわざわざ掲げているし、家康は禁教令に先立ってオランダ貿易を始めている。しかし十六世紀末十七世紀初頭のヨーロッパの文明を摂取したいと考えつつ、そこからキリスト教だけを捨てて取らないというようなことは、到底出来るわけのものではない。そこには教会の羈絆を脱した近世の精神が力強く動いていたとしても、ヨーロッパ人自身すら、それを純粋に取り出すことは出来なかった時代である。その近世の精神に参与し得るためには、それと絡み合ったものをも一緒に取り入れなくてはならなかった。そうしてそのためには当時の日本人は極めて都合のよい状況を作り出していたのである。古い伝統の殻は打ち砕かれた。因襲にとらわれない新鮮な活力は民衆のなかから湧き上って来た。室町時代末期の民衆の間に行われた文芸の作品――ほとんど仮名文字ばかりで書かれ、漢学や漢字の束縛を最少量にしか示していないあの物語や舞の本の類――は、今見ると実に驚かされるような想像力の働きを見せている。死んで甦る神の物語もあれば、美しいものの脆さを具象化したような英雄の物語もある。ああいう書物を読み、ああいう想像力を働かせていた人々の間に、ローマ字書きが拡まり、旧約や新約の物語が受け入れられるということは、いかにも自然なことであったと考えられる。のみならず、当時の日本人の強い知識欲に応えるために、反動改革の急先鋒であったヤソ会士さえも、日本では、近世初頭に急激に発展した自然科学の知識を振り廻したのである。関ヶ原戦後の京都においてさえも、神父の天文や地理に関する話をきき、天体図や地球儀を見せて貰いに来るものが非常に多かったという。地球儀は内裏からも所望され、秀頼も興味を持ったと伝えられている。一六〇五年から京都にいたスピノラは、数学や天文学に通じていて、京都の学者たちを集め、アカデミー風のものを作ったりなどした。つまりキリスト教の伝道は当時のヨーロッパ文明を

全面的に伝える意味をも持っていたのである。そうしてまた、その故に宣教師たちに引きつけられた人々も決して少なくはなかったのである。だからこの際宣教師を追放しキリスト教を禁ずるということは、民衆の中から湧き上って来た新しい力、新しい傾向を押えつけ、故意にそれを古い軌道へ帰すということにほかならなかった。

これは純然たる保守的運動である。それは秀吉が民衆の武装解除をやったときに、はっきりと開始された。農民の子から関白にまでのし上った秀吉自身は、伝統の破壊、従って保守の正反対を具現していたにかかわらず、自分がその運動を完成したときに突如として反対のものに転化し、保守的運動を強力に開始したのである。それは一世紀以来の赤裸々な実力競争において、新興の武士団が勝利を得ると共に、その勝利を確保し、武力の支配を固定させる努力にほかならなかった。この努力において主として眼中に置かれたのは、国外の敵を制圧することであって、日本民族の運命でもなければ、未知の世界の開明や世界的視圏の獲得でもなかった。秀吉は気宇が雄大であったといわれるが、その視圏は極めて狭く、知力の優越を理解していない。彼ほどの権力を以てして、良き頭脳を周囲に集め得なかったことが、その証拠である。彼のシナ遠征の計画の如きも、必要なだけの認識を伴わない、盲目的衝動的なものである。彼はポルトガル人の航海術の優秀なことも、大砲の威力も、十分に承知していた。しかも、その技術を獲得する努力をしなかった。国内の敵しか彼の眼には映らなかったからである。結局彼もまた国内の支配権を獲得するために国際関係を手段として用いるような軍人の一人に過ぎなかった。

家康はこの保守的運動を着実に遂行した人である。彼はそのために一度破壊された伝統を復興し、仏教と儒教とをこの保守的運動の基礎づけとして用いた。特に儒教の興隆は、彼が武士の支配の制度化の支えとして意を用いたところであった。かくして近世の精神が既にフランシス・ベーコンとして現われている時代に、二千年前の古代シナの社会に即した思想が、政治や制度の指導精神として用いられるに至ったのである。それは国内の秩序を確立する上に最も賢明な方法であったかも知れない。しかし、世界における日本民族の地位を確立するためには、最も不幸な方法であった。彼もまた国内の支配権を確保するために国際関係を犠牲にして顧みなかった軍人の一人である。

これらはすべて世界的視圏をおのれのものとなし得なかったことの結果である。そうしてそれが、世界的視圏を初めて開いたポルトガル人とスペイン人との刺戟の結果であることは、まことに皮肉な現象だといわなくてはならな

い。宣教師たちの報告によると、日本の武士たちは、スペイン人の侵略の意図を云い立てはしたが、自分たちの武力には自信を持ち、決してスペイン人には敗けないと思っていたという。秀吉がマニラ総督に朝貢を要求したほどであるから、これは本当であろう。それほどの自信があるなら、侵略の意図などには恐れずに、ヨーロッパ文明を全面的に受け入れれば好かったのである。近世を開始した大きい発明、羅針盤・火薬・印刷術などは、すべて日本人に知られている。それを活用してヨーロッパ人に追いつく努力をすれば、まださほどひどく後れていなかった当時としては、近世の世界の仲間入りは困難ではなかったのである。それをなし得なかったのは、スペイン人ほどの冒険的精神がなかった故であろう。そうしてその欠如は視界の狭小に基くであろう。

その視界の狭小は、宣教師やキリシタンの迫害が進むに従って、ますますその度を加えた。単純に武力を以て思想や信仰に対抗する場合には、武力はそれ自身の無力を見せつけられてだんだんヒステリックになる。おのれの無力を承認しようとせず、一層その力を証示しようと努めるからである。スペイン人の冒険的精神が宣教師の殉教熱となって日本の岸にうち寄せ、日本人のなかの背骨の固い信者たちが同じ殉教熱を以て武力に対抗したとき、武力は実際何の効果もなかった。武力はただ彼らの生命を奪い得るだけであった。しかし武力の威光を示そうとする人々は、あらゆる残虐な殺し方を工夫することによって、それに対抗した。そういう陰惨な気持は、理非もなくキリスト教への憎悪を高めて行く。その結果、貿易を安全に続けるための手段であった禁教が、逆に貿易をもさまざまの形で制限する目的の地位を占めるに至ったのである。

丁度この頃は新しく極東に進出したオランダとイギリスとの勢力が、在来のポルトガルとスペインの勢力に対して激しい競争を敢行している時であった。その間に日本の勢力も絡まり、三つ巴、四つ巴となって極東の海上には連年さまざまの事件を引き起した。その中にオランダ人とイギリス人との衝突、日本人とオランダ人との衝突なども入り混り、決して単純な関係ではないが、しかし大体においてポルトガルとスペインの勢力が後退して行ったのである。ポルトガル人に対する居住の制限、婚姻の制限、碇泊期間の制限などはその現われであった。やがて一六二八年には、マニラ艦隊がシャムで日本商船を捕獲した事件が起り、その報復として、同一君主の支配下にあるという理由で、ポルトガル船三隻を長崎で抑留するというようなこともあった。

そういう情勢の下に、一六三三年には長崎奉行に対して

かなり厳しい外国貿易取締令が通達された。御朱印船以外の船の外国渡航の厳禁、五年以上外国居住の日本人の帰朝の禁止、外国船の輸入品の統制、外国船碇泊期間の短縮などを規定したものである。この法令は、翌年にも繰り返して発布され、翌々年には改正して発布されたが、さらに一六三六年（寛永十三年）に一層厳格にした形で発布された。これが通例、鎖国令と呼ばれているものである。ここでは、御朱印船をも含めて、一切の日本船の外国渡航の禁止、一切の日本人の外国渡航の禁止、一切の外国居住日本人の帰朝禁止、混血児の追放、追放された混血児の帰来及び文通の厳禁、その他前とほぼ同様の外国船及びその輸入品の統制を規定している。貿易を認めている以上、厳密な意味で鎖国令とは云えないのであるが、然し日本人に対して外国との交通を遮断したという点においては、鎖国令に相違ないのである。海外へ連れて行かれた混血児が、日本にいる親類へ文通した場合には、本人は死罪、受取った親類も処刑される。それほどにまで外国との交通を恐れたのである。

この法令は着々実行に移されたが、しかし長崎奉行が実現したのはここに規定された範囲に止まらなかった。前に記したポルトガル船抑留事件に聯関して渡来したマカオの使節ドン・ゴンサロ・ダ・シルベイラは、執拗に努力を続けて一六三四年に将軍に謁見することが出来、その翌年には三隻、翌々年には四隻を率いて渡来したのであるが、この一六三六年の来航の際には、長崎に着くと共に、乗組員八百名も積荷も厳重な検査を受け、船の帆や舵は取り上げられ、船員一同は新築の出島に隔離された。この出島は、ポルトガル人と日本人との交通を遮断するために、長崎の海岸に作った埋立地である。貿易のため外国船が日本に来ても、日本人と外国との交通は絶つことが出来る。そういう考をこの狭い埋立地が具体化しているのである。

ドン・ゴンサロの四隻の船が長崎を出発する時には、混血児二百八十七人を乗せて去った。

この鎖国令を一層強固ならしめたのは、翌一六三七年末に起った島原の乱であった。

島原の乱の爆発した直接の動機は、信仰の迫害ではなくして苛政であった。しかし爆発する力を蓄積して行ったのはやはりキリシタン迫害である。島原半島の地はこの二十年来、想像に余るような残酷な迫害の血の浸み込んだところであった。殉教者は無抵抗の方針を堅持して来たが、それが心理的に与えた効果はむしろ逆である。それに加えて迫害者たちは、明白なキリシタンに対してのみ残虐であって一般領民には仁慈である、という如き区別の出来る人たちではなかった。迫害の心理はやがて彼らを暴虐な為政者たらしめる。そういう為政者の下にある下級官吏は、一般

領民に対して一層苛酷な態度を取ることになる。従って、秘かに信仰を維持している民衆も、そうでない人たちも、その内心の反抗においては一つであった。その気運のなかで、小西の遺臣の子、天草四郎時貞という十六歳の少年に、特別の天命が下ったという風の信仰が燃え上って来たのである。

丁度その頃、一六三七年の十二月の中頃に、或る村で下級官吏の横暴から村民が憤って代官を殺すという事件が起った。それは忽ち伝染し、他の村々でも代官が殺された。一揆が蜂起したのである。一揆は領主の城島原を囲んだ。そうして城主の米倉を占領し、領内の米を集めて、原城に拠り、四万に近い人数を以て三ヵ月間討伐軍に抵抗した。天草島でも十日ほど遅れて蜂起し、領主の兵を破って富岡に迫ったが、城を抜くことが出来ず、原城の一揆に合流した。

叛乱軍は信仰の情熱に燃え、恐ろしく強かった。最初幕府から向けられた討伐軍の指揮官板倉内膳正は、原城攻略に失敗して、一六三八年二月十四日に戦死した。二度目の指揮官松平伊豆守は、攻囲軍を十数万に増し、オランダ船に頼んで、十六日間砲撃して貰ったりなどしたが、大して効果はなかった。結局糧食の欠乏によって、四月十一、十二日の総攻撃に陥落したのである。女子供を合せて三万七千といわれた籠城のキリシタンは、全部殺戮された。

このキリシタンの抵抗力は、武士たちを驚かせたと共に、また彼らのキリシタン憎悪を強め、禁教政策に対する信念を固くした。外国との交通は徹底的に禁圧しなくてはならぬ。そこでこの後数年の間、禁教と鎖国との法令制度が続々として制定されたのである。

ポルトガル人の貿易も、島原の乱の平定の年、一六三八年が最後であった。乱後の処置に、江戸から派遣された太田備中守は、一六三九年九月二日、ポルトガル人追放、ポルトガル船来航禁止を云い渡した。理由は宣教師に対する援助である。その年来航したポルトガル船は即時追い返され、翌年通商再開の嘆願に来たマカオの使節一行は、大部分死刑に処せられた。

あとに残ったオランダ商人は、いよいよ日本貿易の独占を祝ったのであったが、一六四〇年十一月七日、大目附井上筑後守から商館破壊の命令を受けた。その理由はオランダ人もまたキリスト教徒であること、商館の建物にヤソ紀元の年号が記されていることである。それと同時に日曜日を守ることの禁止、商館長の年々交代などが命ぜられた。右の商館の建物は、オランダ人が長崎移転を不利なりと考えた程、多額の費用のかかったものであったが、商館長は当局の断乎たる態度を見て、その夜から徹夜で破壊工作に

取りかかった。この従順な態度がオランダ貿易を救ったといわれている。

翌年オランダ商館は長崎への移転を命ぜられた。前年の商館破壊命令は、この移転を容易ならしめるためであったのである。かくしてオランダ人は、この後二百年の間、長崎の出島に閉じ込められた。そうしてその出島が日本人と外国との交通の象徴となった。

このように鎖国の形成が完成するまでには、秀吉の宣教師追放令以来四十五年、家康の禁教令からでも二十七八年を要している。その間に為政者の側でのキリスト教に対する憎悪が漸次高まり、遂に海外との交通そのものを恐れるに至ったのであるが、しかしそれは国内での支配権獲得の欲望が他の文化的欲求や近世的動きに優越していたことを示すのみであって、国民の間に外に向う衝動がなかったことを証示するものではない。一六〇四年から一六一六年までの十三年間に幕府の出した海外渡航の許可状は百七十九通に達しているし、その後一六三五年の海外渡航禁止に至るまでの海外渡航船は百四十八隻以上であったといわれている。その行先は、台湾からマラッカに至るまでの諸地方、ブルネイやモルッカの諸島などである。船は、大きい場合には三百名以上を乗せ、その大部分は商人であった。船主も、島津家久、松浦鎮信、有馬晴信、加藤清正、細川忠興などの大名や、末次平蔵、長谷川権六などの幕府官吏を混えてはいるが、大部分は商人であった。角倉了以、同興一、末吉孫左衛門、荒木宗太郎、西宗真、船本弥七郎、などが有名である。そうしてこれらの人たちは、外に向って相当に活溌な働きを見せていたのである。

右の内で一六〇八年にチャムパ（占城）へ行った有馬晴信の船は、帰途マカオに滞留して事件を起した。船員が乱暴してポルトガル兵に銃殺されたのである。翌年マカオの司令官ペッソアは、マードレ・デ・デウスという大船に多量の荷を積んで長崎に来た。この船は縦四十八間、横十八間、吃水線上の高さ九間、檣四十八間であった。ペッソアは有馬晴信の船の事件を云い立てて、日本人のマカオ渡航禁止を家康に乞い、その許可を得た。他方有馬晴信も船員が侮辱を受けたことを云い立てて、その雪辱の許可を家康に請願した。家康は、事実を調査して適当に処分せよと晴信に命じた。そこで晴信は、長崎奉行と相談してペッソアを召喚したが、ペッソアはそれに応ぜず、大急ぎで出帆の準備に取り掛った。止むを得ず晴信は実力に訴えることにして、一六一〇年一月六日にマードレ・デ・デウス号を攻撃し始めた。ペッソアは錨索を切って逃げ出そうとしたのであったが、風がなくて動けず、三日間攻撃を受け続けた。そうして四日目に漸く微風が出たので福田のあたりまで逃げた。このまま逃げられれば晴信の面目は丸潰れである。長崎奉行は晴信の攻撃が手ぬるいと非難し、晴信はそれを口惜しがって、「奉行を斬り長崎を焼いて自殺する」と云ったほどであった。幸いまた風が落ちて、船が動かなくなった。有馬の船隊は船にやぐらを作りその前面に生皮を張って銃撃のなかを突進して行った。この肉迫戦の間に防禦側の投げた焼弾で火が帆布に移り盛んに燃え出した。ペッソアは火薬庫に火をつけろと命じて海へ飛び込んだ。火薬の爆発と共に船はひっくり返って沈み、ペッソア以下は死んだ。これでようやく晴信はその面目を保ったのである。

この事件は勿論面倒な外交問題を引き起したが、またキリシタン大名有馬晴信の没落の因ともなった。長崎奉行の配下であった岡本大八が、右の焼打事件の恩賞を周旋すると称して、晴信から再三賄賂を取ったのである。それが露見して捕えられると、今度は大八が晴信の逆心を訴えた。長崎奉行を斬り長崎を焼くといった晴信の興奮した言葉を云い立てたのである。結局大八は火刑、晴信は流罪次いで切腹となったが、その処刑は一六一三年の禁教令の直前で、大八、晴信、いずれもキリシタンであった。外に向う衝動が巧みに鎖国的傾向に利用せられた一例といってよい。

同じ有馬晴信は、一六〇九年に家康の内命を受けて台湾に探検隊を送っている。これは成功しなかったので、一六一六年に長崎の代官村山等安が幕府の許可状を得て十三隻の遠征艦隊を台湾に送ったが、これもまた暴風に逢って失敗した。日本の貿易船が、新しく台湾へ進出したオランダ人と衝突しはじめたのは、一六二五年頃からである。長崎代官末次平蔵の船の船長浜田弥兵衛が台湾で活躍したのはこの時であった。生糸貿易上のいざこざがだんだんこじれて、一六二八年に弥兵衛が二隻を率いて台湾に行ったときには、船に小銃など相当の武器が積込んであったし、乗組員も四百七十人であった。万一の場合には武力行使を覚悟していたのである。それに対してオランダの台湾長官ノイツは初めから高圧的に出て、武器を取り上げたりなどした。だから弥兵衛は、ノイツの不意を衝いて捕虜にし、それを枷に使って生糸貿易の懸案を解決する、というような離れ業をやった。しかもそれは出先での挿話的な出来事ではなく、やがて平戸でのオランダ船の抑留、オランダ商館の閉鎖にまで発展して行った。オランダのバタビヤ総督は翌一六二九年に特派使節を寄越して事件の解決に努力したが、幕府は台湾におけるオランダの根拠地ゼーランヂヤ城の引き渡し或は破壊を要求し、それを拒絶すればオランダ貿易を禁止するような気勢を見せた。オランダ人は勿論こ

の要求には応じなかったが、しかし、日本貿易を失うことをも怖れ、遂に浜田弥兵衛と事を起した前台湾長官ノイツを犠牲にすることにして、一六三二年にノイツを日本に連れて来て日本側に引き渡した。その頃には弥兵衛の船の船主であった初代末次平蔵も既に死んでいたし、鎖国の形勢が急激に熟しつつあったために、幕府は事件責任者の引き渡しを以て満足し、船の抑留や商館の閉鎖を解いてオランダ貿易を旧に復したのである。

その後オランダ人はいろいろと幕府の御機嫌を取ったので、ノイツは一六三六年に釈放された。また翌一六三七年には、オランダ人側から、日本とオランダとが同盟してポルトガルの根拠地マカオ、スペインの根拠地マニラ及び基隆を攻略しようという案を持ち出した。やがて長崎代官の二代目末次平蔵は、商館長コークバッカーに宛てて、幕府はキリスト教宣教師の根拠地フィリッピンを征服するに決した、ついては軍隊の渡航や上陸を掩護し、スペイン艦隊を撃退する、という任務に必要なオランダ艦隊を派遣して貰いたい、と申込んで来たという。オランダ商館は大艦四隻、ヨット二隻の派遣を決議し、バタビヤ総督もこのことを本国の十七人会に報告したというのであるから、架空のことではないであろう。

このフィリッピン遠征は島原の乱のために何処かへふっ飛んでしまったが、一六三七年になお気運が動いていたのであるから、外に向う衝動はなおかなり強かったといわなくてはならない。だからこの頃に南洋の日本町が相当に栄えていたということは、不思議ではないのである。

シャムの日本人町は、首府アユチヤの南郊にあった。メーナム河を挟んでポルトガル人町やシナ人町と対し、オランダ商館とも近かった。この町は、一六一〇年代には既に出来ていたらしい。町の最初の頭領は純広、二代目が城井久右衛門、三代目が山田長政である。長政は沼津の城主大久保忠佐の駕籠昇であったが、何時の間にかシャムに渡り、一六二一年にはシャム四等官、一六二八年には一等官に昇進している。シャムの内乱に関与し、かなり大きい勢力を持っていたが、一六三〇年に毒殺された。そのあと日本人町は焼き払われたが、やがて復興して二人の頭領を置くことになった。

カンボヂヤの日本人町は、今のプノンペンに近い当時の首府ウドンにあった。やはりポルトガル人町やシナ人町と相隣って居り、オランダ商館とも近かったが、一六三七年の見聞記によると、日本人は七八十家族で、皆追放人であった。オランダ人たちを支配している港務長官の一人も日本人であった。この日本人たちは一六二三年にシャム軍が侵入したとき国王を援けて敵を撃退し、一六三二年にシャ

ムの圧迫が加わったときには七隻のジャンクでメーナム河口へ封鎖に行った。一六三六年の内乱に際しても国王を助け、王から非常に尊敬されていた。ここへ日本船が来たのは一六三六年が最後である。

交趾の日本人町は、広南の外港ツーランと、その南方八九里のフェーホとにあった。フェーホでは一六一八年に船本弥七郎が初代の頭領になった。

マニラの日本人町は、すでに十六世紀の末に千人の人口を有して居り、一六二〇年頃には三千人に達した。一六一四年の大追放で高山右近、内藤如安、その妹ジュリヤなど大勢来たが、右近は間もなく死に、如安たちはヤソ会の関係で日本人町にはいなかった。一六二四年頃からは日本とスペインとの関係が悪化し、一六三七年には八百人に減じていたという。

右のような日本人町のないところにも日本人は進出していた。香港の西のマカオはポルトガル人の根拠地であった関係から、一六一四年の追放者百余人、一六三六年の追放者二百八十七人などが行っているが、日本から奴隷として連れて行かれたものも少なくなかったらしい。そこからずっと西へ行ってトンキンにもかなりの日本人がいたらしい。一六三六年にはオランダのカピタンが日本人の家に泊めて貰ったり、長崎人和田理左衛門や日本婦人ウルサンの斡旋によって、国王に謁見したりしている。更にマレー半島南端のマラッカでは、一六〇六年のオランダ艦隊の攻撃のときに、日本人が守備隊に加わって勇敢に防禦に努めたといわれている。ジャバのバタビヤへは、一六一三年にオランダ人が大工・鍛冶・左官・水夫・兵士など六十八人を雇って行った。その後も日本の移民を幾度か連れて行ったらしい。一六二一年には幕府がそれを禁じたほどである。東インド会社の使用人としてはその頃七十人とか五十人とかの日本人がいたし、自由市民としても百幾十人の男女がいた。モルッカ諸島にも、一六二〇年には二十人、一六二三年にはアムボイナ島に六十三人の日本人がいたといわれる。なおその他南洋諸島やインドにも少しずつは行っていた。

しかし以上のように外に出て行った日本人に対して、日本の国家はほとんど後援をしなかったのみならず、逆にその抑圧に努めて、遂に一六三六年に、全然本国との交通を絶ってしまった。従って、この後の日本人町や海外在留者は、ただ衰退し消滅して行くばかりであった。だから、当時の日本人に外に向う衝動がなかったのではない、為政者が、国内的な理由によってこの衝動を押し殺したのである、とはっきり断言することが出来るのである。

つまり日本に欠けていたのは航海者ヘンリ王子であっ

た。或はヘンリ王子の精神であった。

恐らくただそれだけである。そのほかにさほど多くのものが欠けていたのではない。

慶長より元禄にいたる一世紀、即ちわが国の十七世紀は、文化のあらゆる方面において創造的な活力を示している。その活力は決して弱いものではなく、もし当時のヨーロッパ文化を視圏内に持って仕事をしたのであったならば、今なおわれわれを圧倒するような文化を残したであろうと思われるほどである。学者として中江藤樹、熊沢蕃山、伊藤仁斎、文芸家として西鶴、芭蕉、近松、画家として光琳、師宣、舞台芸術家として竹本義太夫、初代団十郎、数学者として関孝和などの名を挙げただけでも、その壮観は察することが出来る。

文化的活力は欠けていたのではない。ただ無限探求の精神、視界拡大の精神だけが、まだ目ざめなかったのである。或はそれが目ざめかかった途端に暗殺されたのである。精神的な意味における冒険心がここで萎縮した。キリスト教を恐れて遂に国を閉じるに至ったのはこの冒険心の欠如、精神的な怯懦の故である。当時の日本人がどれほどキリスト教化しようと、日本がメキシコやペルーと同じように征服されるなどということは決してあり得なかった。

キリスト教化を征服の手段にするというのは、それによって国内を分裂させ、その隙に乗ずるという意味であるが、日本国内の分裂はキリスト教を待つまでもなくすでに極端に達していたのであって、隙間はポルトガル人の前に開けひろげであったのである。征服が可能であれば、それを手控えるようなポルトガル人ではなかったであろう。勿論、キリスト教化が進めば、秀吉や家康のような考を以て国内を統一することは不可能になったかも知れない。しかしどこかのキリシタン大名が国内統一に成功した場合でも、キリシタンであるが故に日本の主権を放棄してスペイン国王に服属したであろうなどとは到底考えられないのである。スペイン国王への書簡にそれに類する文句があったからと云って、それを証拠にするわけには行かない。書簡の作法では、君主として仰いでいるわけでもない相手に対して誰もが平気で「君」と呼び、おのれを忠実な僕という。それと政治的な関係とは別である。日本人はヨーロッパ文明にひかれてキリスト教を摂取したのであって、そこに当時の日本人の示したただ一つの視界拡大の動きがあった。その後のキリシタン迫害は、キリシタンとなった日本人の狂熱的な側面をのみ露出せしめることになったが、しかしそれがすべてではなかった。狂熱的傾向は当時のヨーロッパにおいても顕著であったし、わが国の一向一揆などもそれを

明瞭に示しているが、しかしこの時代的特性のなかに根強く芽をふき出した合理的思考の要求こそ、近世の大きい運動を指導した根本の力である。わが国における伝統破壊の気魄は、ヨーロッパの自由思想家のそれに匹敵するものであった。だからたとい日本人の大半がキリスト教化するという如き情勢が実現されたとしても、教会によって焚殺されたブルーノの思想や、宗教裁判にかけられたガリレイの学説を、喜んで迎え入れる日本人の数は、ヨーロッパにおいてよりも多かったであろう。そうなれば、林羅山のような固陋な学者の思想が時代の指導精神として用いられる代りに、少なくともフランシス・ベーコンやグローティウスのような人々の思想を眼中に置いた学者の思想が、日本人の新しい創造を導いて行ったであろう。日本人はそれに堪え得る能力を持っていたのである。

ヤソ会の宣教師は、日本における仏教諸派の間の対立抗争が、キリスト教に対する仏教の防禦力を弱めていることを指摘した。が、そのことはやがて日本におけるキリスト教の伝道そのものの運命ともなったのであって、秀吉の宣教師追放の頃からの旧教諸派の間の対立抗争は著しいものであった。そこへ間もなく新教を奉ずるオランダ人や、ローマ教会を離脱したイギリス人たちが現われてくる。キリスト教を無制限に摂取しても、それがただ一つの運動に統一され、日本侵略の手段に用いられるなどということは、到底起り得なかったのである。この事情は少しく冷静に観察しさえすれば直ぐに解ることであった。それを為し得なかったのもまた為政者の精神的怯懦の故である。

ただこの一つの欠点の故に、ベーコンやデカルト以後の二百五十年の間、或はイギリスのピューリタンが新大陸へ渡って小さい植民地を経営し始めてからあの広い大陸を西へ西へと開拓して行って遂に太平洋岸に到達するまでの間、日本人は近世の動きから遮断されていたのである。このことの影響は国民の性格や文化の隅々にまで及んでいる。それにはよい面もあり悪い面もあって単純に片附けることは出来ないのであるが、しかし悪い面は開国後の八十年を以てしては容易に超克することは出来なかったし、よい面といえども長期の孤立に基く著しい特殊性の故に、新しい時代における創造的な活力を失い去ったかのように見える。現在のわれわれはその決算表をつきつけられているのである。

レアン　Leão……（清水）313ff.（野津領主）356
レアン，ドン・　Dom Leão（日本人）……282
レイテ　Leyte ……145
レオン　Leon（ニカラグァの町）……83
レオン，キエサ・デ・　Cieza de Leon ……111
レオン，フアン・ポンスェ・デ・　Juan Ponce de Leon ……71
レガスピ，ミゲル・ロペス・デ・　Miguel Lopez de Legaspi……151ff.
レティクス　Rheticus ……155
レーテス　Jñigo Ortiz de Retes……151—3
レーペ，ディエゴ・デ・　Diego de Lepe……76

ロ

ロアイサ，ガルチア・ホフレ・デ・　Garcia Jofre de Loaysa ……148
ロドリゲス　Francisco Rodriguez……382, 385
ロビンソン・クルーソー　Robinson Crusoe ……153
ロマン，ペロ・　Pero Romão ……359
ロヨラ，イグナチウス・　Ignatius Loyola ……59, 182, 191, 194
ロヨラ，ジョルジ・　Jorge Loyola（日本人イルマン）……361, 363ff.
ローラン　Roland ……11
ロルダン，フランシスコ・　Francisco Roldan……75
ロレンソ　Lorenzo（フランシスコ・ダルメイダの子）… 46ff., 49
ロレンソ　Lourenço（日本人イルマン）……
192ff., 203, 208ff., 211, 220, 224—6, 259,
262ff., 268, 271ff., 274ff., 276ff., 268—97
300—2, 305ff.,310, 315, 322, 324, 337—9,
342, 347, 353, 367, 369ff., 373, 379

ワ

ワイナ・カパク　Huayna Capac ……121, 311ff.
ワスカル　Huasacr …… 121ff., 131, 134
ワトリング島　Watling I. ……70
ワマチュコ　Huamachuco ……133
ワリニャーニ，アレッサンドロ・　Alessandro Valignani…… 321, 336ff.,
339—48, 358—66, 379ff., 382, 384ff.
ワルドゼーミューラー，マルチン・　Martin Waldseemüller ……77
ワルフィシ湾　Walfisch, Walvis B. ……37

ママ・オェロ・ワコ　Mama Oello Huaco ……108
マームード　Mahmud……52
マヤ　Maya ……84, 98
マラバル　Malabar……40
マラッカ　Malacca … 47, 51—3, 58—61, 80, 140, 147, 149, 167ff., 181—4, 197, 201, 207, 213, 380, 396, 399
マリア　Maria（野津領主夫人）356（ガラシヤ夫人侍女）378
マリアナ諸島　Mariana (Ladrona) Is. …… 144, 148ff., 154
マリンディ　Malindi, Melinde ……40
マルキーズ諸島　Marquesas Is. ……144
マルケナ，フアン・ペレス・デ・　Juan Perez de Marchena ……67
マルチネス　Pedro Martinez……381, 385
マルチノ　Martino（原）……361
マルティン　Martin……144ff.
マルティンス　Fernão Martins ……64
マルディヴ（マルヂバ）　Maldive ……47
マンコ・カパク　Manco Capac……（インカ始祖）108ff., 134
（ワスカルの弟）122
マンショ　Mancio……（三箇城主の子）324ff.
（伊東祐益）354, 361
マンジ　Manzi ……28, 65

ミカエル（ミゲル）　Michael (Miguel)（千々石清左衛門）……361
ミシシッピー　Mississippi ……81
ミラノ　Milano…… 14ff.,
ミンダナオ　Mindanao……145, 148, 150

ムスタファ　Mustafa ……56
ムツセメルリ　Mussemelly ……31

メオサン，ジュスチノ・　Justino Meosão（京都の信者）……313ff.
メキシコ（メシコ）　Mexico……83, 86—99, 135, 149—53, 381, 387, 389, 400
メヂナ　Medina……4
メーナム河　R. Menam ……399
メネゼス，エンリケ・デ・　Enrique de Menezes ……56
メネゼス，ドゥアルテ・デ・　Duarte de Menezes ……56
メランヒトン　Melanchthon ……155
メルヴ　Merv ……6
メンダニャ，アルバロ・デ・　Alvaro de Mendaña……153
メンドーサ　Mendoça ……68
メンドーサ，アントニオ・デ・　Antonio de Mendoça ……150
メンドサ，マヌエル・デ・　Manuel de Mendoça ……232, 238ff.

モザンビク　Mozambique ……39, 46
モッセル湾　Mossel B. ……37
モニカ　Monica（日本娘）……258
モハメッド　Mohammed, Muhammad, Mahomet ……3
モラーレス，ガスペル・　Gasper Morales ……82, 99
モーリッツ（オレンヂ公）　Maurits, Graf van Nassau, Prins van Oranje …… 386ff.
モリナ，アロンソ・デ・　Alonso de Molina……106
モルッカ　Moluccas…53, 58ff., 140, 144, 156, 148, 150, 152, 396, 399
モンテ・クリスチ　Monte Cristi……73
モンテスーマ　Montezuma……89—91, 94
モンテビデオ　Montevideo……142
モンバサ　Mombasa ……40
モンロヴィア　Monrovia ……36

ヤ

ヤジロー（アンジロー）　Yajiro (Anjiro) ……168, 181—6, ……188ff., 192—4, 196, 259
ヤルカンド　Jarkand, Yarkand ……28

ユカイ　Yucay, ……111
ユカタン　Yucatan ……77, 84—6

ラ

ラプラタ　La Plata ……140
ラヤッツォ　Lajazzo ……28
ラ・ラビダ　La Rabida……67ff.

リオ・デ・オーロ　Rio de Oro……33
リオ・デ・ヂャネイロ　Rio de Janeiro ……142
リオナルド・ダ・ヴィンチ　Lionardo (Leonardo) da Vinci ……17
リーフデ（船名）　Liefde（前名 Erasmus）……386
リマ　Lima……136
リマサガ（マサゴア）　Limasagua (Macagua) ……145
リユベック　Lübeck ……14

ルイス，ドン・　Dom Luis（新助）……244, 249
ルイス，バルトロメー・　Bartolome Ruis ……101—4
ルケ，エルナンド・デ・　Hernando de Luque …… 100ff., 103ff.
ルシア　Lucia（三箇領主夫人）……341
ルソン　Luzon ……152, 380
ルター　Luther ……155
ルブルク　Rubruk ……27

フランシスコ，ドン・ Dom Francisco……（沢城主）263,（大友宗麟）354
フロイス，ルイス・ Luis Frais …… 197, 207., 229., 231, 238, 248—62., 264—71, 273ff., 285—302, 304—16, 318—20, 322ff., 326ff., 328, 330, 333, 339, 342—4, 347, 351ff., 354—6, 366, 368, 372ff., 382
フロレス Luis Flores……389
ブリストル Bristol ……63
ブリトー，アントニオ・デ・ Antonio de Brito……59
ブル Buru ……146
ブルグンド族 Burgunder ……3
ブルゴーニュ Bourgogne ……3
ブルージュ Bruges ……14
ブルネイ Brunei ……146, 396
ブルーノ Giordano Bruno……401
ブルーワー，ヘンドリック・ Hendrik Brouwer ……387
プェルト・サン・フリアーン（ポート・セント・ジュリアン）Puerto San Julian (Port S. Julian) ……142
プェルト・ビエホ Puerto Viejo ……124
プトレマイオス Ptolemaios Klaudios ……33
プナ Puna ……124
プノンペン Pnom-Penh ……398
プラトーン Platon ……6
プリニウス Plinius ……63
プレスコット William Hickling Prescott……105, 110, 119
プレスビテル・ヨハンネス（プレスター・ジョン）Presbyter Johannes (Prester John)……27, 34, 37ff.
プロヴァンス Provence ……11
プロタショ Protasio（有馬晴信）……362

ヘートン Hayton ……27
ヘリアント Heliand, Heiland ……8
ヘンリ（エンリケ）航海者 Henry the Navigator (Dom Enrique el Navegador) ……31, 67, 72, 78, 155, 159, 165, 168ff., 399ff.
ベオヴルフ Beowulf ……8
ベーコン，フランシス・ Francis Bacon ……392, 401
ベーコン，ローヂァ・ Roger Bacon……17
ベナルカザル Benalcazar……81
ベネズェラ Venezuela ……76, 79
ベハイム，マルチン・・ Martin Beheim……37
ベラ，ブラスコ・ヌンニェス・ Blasco Nuñez Vela ……136ff.
ベラ・クルス Vera Cruz …… 85ff., 90ff., 94
ベラグワ Veragua（パナマ地峡）……78

ベラスケス，ディエゴ・ Diego Velasquez …… 71, 85ff., 90, 94
ベルショール Belchior …… 203, 208, 211, 235, …… 238ff., 243, 256, 278, 286, 337
ベント Bento（京都の信者）……313
ペグ Pegu ……53
ペッソア Andrea Pessoa ……396ff.
ペドラリアス・デ・アビラ Pedrarias de Avila ……81, 99ff.
ペルー Peru…… 83, 98ff., 135—9, 150, 153, 381, 389, 400
ペレイラ Pereira……232
ペレイラ，ディエゴ・ Diego Pereira……197
ペレイラ，ドン・ジョアン・ Dom João Pereira ……272ff.
ペロ・デ・コヴィリャム Pero de Covilham ……38

ホチミルコ Xochimilco ……96
ホンデュラス Honduras…… 77ff., 87, 89, 98
ボゴタ Bogota ……81
ボテリヨ，ローレンソ・ Lourenço Botelho……182
ボハドル Bojador ……31, 33, 169
ボハラ（ボカラ） Bochara, Bokhara ……6, 28
ボバディリャ，フランシスコ・デ・ Francisco de Bobadilla……75
ボホル Bohol ……146, 152
ボムベイ Bombay ……56
ボリビア Bolivia ……137, 139
ボルヂア，チェーザレ・ Cesare Borgia ……16
ボルネオ Borneo ……30
ボロニャ Bologna ……155
ポトシ Potosi ……137
ポポカテペトル Popocatepetl……86
ポーロ，マルコ・ Marco Polo ……17, 28—30, 33, 66

マ

マカオ Macao ……394—6, 398ff.
マガリャンス（マジェラン），フェルナン・デ・ Fernão de Magalhães (Magallanes, Magellan)… 51, 58ff., 81, 140, 142—7, 149
マキアヴエリ Machiavelli ……16
マーシャル諸島 Marshall Is. …… 144, 149ff., 154
マスカレニャス，ペロ・ Pero Mascarenhas ……56
マセンシヤ Maxenxia（小早川秀秋夫人）……371
マダガスカル Madagascar ……29, 38, 47
マドラス Madras ……30
マードレ・デ・デウス Madre de Deus……396
マニラ Manila ……152, 154, 384, 386, 388—90, 393, 399
マノエル一世 Manoel I. …… 38, 45ff., 50, 52, 54, 56, 76

ハウハ　Xauxa, Jauja ……132, 134, 138
ハルマヘラ　Halmahera……147—9, 151
ハレブ　Haleb ……6
ハロ，クリストヴァル・デ・　Christoval de Haro ……140
バウティスタ，ジョアン・　João Bautista……248, 273, 279
バクダード　Bagdad, Baghdad ……6, 28
バス，アルバロ・　Albaro Vaz ……181—3
バス，ゴンサロ・　Gonçalo Vaz ……249, 273, 278
バス，ヂヨゴ・　Diego Vaz ……197
バスコ・ダ・ガマ　Vasco da Gama ……
……38—45, 56, 59, 75, 77, 188, 193
バスティダス，ロドリゴ・デ・　Rodrigo de Bastidas ……79
バスラ　Basra ……6, 28
バタビヤ　Batavia ……398ff.
バダホス　Badajoz ……148
バッセイン　Bassein ……57ff.
バハドゥル　Bahadur ……56
バブ・エル・マンデブ　Bab el Mandeb ……56
バプチスタ，ペドロ・　Pedro Baptista ……380
バラレッジョ，アレッサンドロ・　Alessandro Vallareggio ……278
バリャドリード　Valladolid ……77, 140
バルク　Balkh ……6, 28
バルセロナ　Barcelona ……14, 70
バルベルデ　Vicente de Valverde……129
バルボア，バスコ・ヌニェズ・　Vasco Nuñez Balboa…… 78ff., 96, 99ff., 139
バルボサ，ディオゴ・　Diogo Barbosa ……140, 142
バルボサ，ドゥアルテ・Duarte Barbosa ……142, 145
バンコック　Bangkok……30
パウモツ諸島　Paumotu Is. ……144, 148
パウラ　Paula（日本少女）……301
パウロ　Paulo（日本人信者）210, 212（日本イルマン）
245, 273, 280, 347, 360, 366（文太夫）341, 345
パエス　Raez ……385
パシヨ　Francisco Passio ……371
パジェス，レオン・　Léon Pagés……382
パタゴニア　Patagonia……144
パタニ　Patani ……167
パドゥア　Padua ……155
パナマ　Panama …… 79ff., 83, 100, 123ff., 137ff., 140
パラワン　Palawan ……146
パリア　Paria ……76
パレルモ　Palermo ……6, 14
パレンバン　Palembang……29

パロス　Palos……67ff., 70

ヒッポ　Hippo ……5
ビセンテ　Vicente（日本人イルマン）……366, 368
ビスナガ　Bisnaga ……52
ビヂャプール　Bidjapur, Bidschapur ……50
ビリャロボス，ルイ・ロペス・デ・Ruy Lopes de Villalobos ……150—2
ビルー　Biru ……100
ビルマ　Burma……28—30
ビレラ，ガスパル・　Gaspar Vilela ……202, 207, 214—30, 232, 234,
252, 257—62, 264, 266—8, 277—9, 305, 313, 316
ビントゥン　Binh Thuan ……61
ピガフェッタ，アントニオ・　Antonio Pigafetta ……142, 144—7
ピサ　Pisa……14
ピサロ，エルナンド・　Hernando Pizarro…… 126ff., 135ff.
ピサロ，ゴンサロ・　Gonzalo Pizarro ……135—9
ピサロ，フランシスコ・Francisco Pizarro ……78—82, 99—107, 150
ピノス　Pinos ……73
ピレイラ　Pireira ペレイラを見よ
ピンソン，ビセンテ・ヤンネス・　Vicente Yañez Pinzon ……76, 140
ピントー　Fernão Mendes Pinto ……61

ファラビ　Farabi, Alfarabi ……7ff.
ファリヤ，ジョルジ・デ・　Jorge de Faria ……197
ファレイロ，ルイ・　Ruy Faleiro……140
ファロエ諸島　Faroe Is. ……63
フィゲイレド，ベルシヨール・デ・　Belchior de Figueiredo……
…… 252ff., 272—4, 279
フィリッピン　Philippine …… 144, 149—52, 154ff., 380ff., 398
フィレンツェ　Firenze ……14, 30, 65
フェゴ　Fuego ……153
フェーホ　Faifo 坡舗 ……399
フェリパ　Felipa（キタ夫人）……316
フェリピナス（フィリッピン）Felipinas (Philippine)……150
フェリペ二世　Felipe II. ……151
フェルディナンド王（フェルナンド五世）Ferdinand, FernandoV. ……45, 82
フェルナンデス，ジョアン・　João Fernandes …… 184ff., 189—94, 199,
201—3, 205ff., 209—16, 219ff., 228ff., 234,
238, 240, 242, 244, 249, 252—4, 271, 274, 279
フェルナンデス，フアン・　Juan Fernandez……153
フェルナンド，ドン・　Dom Fernando Cavallero ……181
フランク族　Franke ……3, 5
フランシスコ，ジョアン・　João Francisco ……320, 322ff, 329, 332

チャウル　Tschaul ……47, 57
チャルクチマ　Challcuchima ……132, 134
チャンパ　Champa 占城 占婆 ……28, 30, 396
チリー　Chile ……115, 121, 135, 138, 153
チンギスカン　Chingis Khan 成吉思汗 ……20
ヂウ　Diu ……48, 56ff.
ヂェノヴァ，ヂェノア　Genova, Genoa ……14, 29
ヂッダ　Jidda, Dschidda ……55ff.
ヂヨゴ　Diogo（日本人） ……220ff., 228

ツーラン　Tourane 茶麟 ……399
ヅアルテ・ダ・ガマ　Duarte da Gama ……193, 213

ティドール　Tidor ……58, 146ff., 149
ティントー河　R. Tinto ……67
テオティワカン　Teotihuacan ……95
テオドーシウス　Theodocius ……5
テオドリック　Theodoric ……3
テツクコ　Tezcuco, Tetzcoco ……87, 96ff.
テノチティトラン　Tenochtitlan ……87
テペアカ　Tepeaca ……96
テュニス　Tunis ……36
テルナーテ　Ternate ……58, 146ff.
テワンテペク　Tehuantepec ……98, 148
ディアス，ディニズ・　Diniz Dias ……34
ディアス，デル・カスティヨ，ベルナール・　Bernal Diaz del Castillo ……81, 92
ディアス，バルトロメウ・　Bartolomeu Dias ……37ff., 72
デカルト　Descartes ……401
デカン　Deccan ……30, 57
デスピノーザ，ゴンサロ・バス・　Gonzaio Vas d'Espinoza ……146ff.
デフォー，ダニエル・　Daniel Defoe ……153
デリー　Delhi ……57

トゥパク・インカ・ユパンキ　Tupac Inca Yupanqui ……121
トゥマコ　Tumaco ……（酋長）80（湾）103
トゥラ　Tula ……86
トゥラスカラ　Tlazcala ……90ff.
トゥリスタン　Nuño Tristão ……34
トゥリニダッド　Trinidad ……74
トゥルーバドゥル　Troubadour ……11
トゥンベス　Tumbez ……102, 104ff., 123ff., 137ff.
トスカネリ，パオロ・　Paolo Toscanelli ……17, 29ff., 36

トッレ，フェルナンド・デ・ラ・　Fernando de la Torre. ……149
トッレ，ベルナルド・デ・ラ・　Bernardo do la Torre ……150, 152
トトマーク　Totomac ……90
トパルカ　Toparca ……134
トマス・アクィナス　Thomas Aquinas ……7, 12, 20, 194
トマス，ドン・　Dom Thomas（内藤土佐）……310
トメバンバ　Tomebamba ……122
トルキスタン　Turkistan, Turkestan ……6
トルテーク　Toltek ……87ff., 98
トルレス，コスメ・デ・　Cosme de Torres ……168, 184, 189, 195, 199, 202—5, 208—11, 214—7, 225, 232, 234ff., 238—44, 247—56, 268, 271—4, 276—86, 283—5, 300, 336, 348
トルレス，ジョアン・デ・　João de Torres（日本人） ……219
トルレス，ルイス・バエス・デ・　Luis Vaes de Torres ……154
トレド　Toledo ……123
トンキン　Tongking ……399

ナ

ナバルレ　Navarre ……9
ナポリ　Napoli ……14ff.

ニカラグゥ　Nicaragua ……83, 89, 135
ニクエサ，ディエゴ・デ・　Diego de Nicuesa ……78, 81
ニコバル　Nicobar ……29
ニコロ・デ・コンティ　Nicolo de, Conti ……30
ニシャプール　Nischapur ……6
ニヂェル　Niger ……34
ニューギニア　New Guinea ……149—51, 153ff.
ニューブリテン　New Britain ……151
ニューヘブライヅ　New Hebrides ……154
ニュールンベルク　Nürnberg ……14, 155

ヌネス（ヌニェス），ベルショール・　Belchior Nuñes ……207, 211, 214—7, 220, 257
ヌネズ　Nunez ……34

ノイツ　Pieter Nuijts ……397
ノローニャ，ガルチア・デ・　Garcia de Noronha ……57ff.
ノンブレ・デ・ディオス　Nombre de Dios ……79, 138

ハ

ハイチ　Haiti ……70ff., 74—6, 78, 94, 96
ハイルスベルク　Heilsberg ……155

シルバ，ペドロ・ダ・ Pedro da Silva ……184, 188
シルベイラ，ドン・ゴンサロ・ダ・ Dom Gonçalo da Silveira ……394
ジパング（チパング，チッパング） Zipangu, Cippangu 日本国……
……28ff.,65, 72ff.
ジャッケリ Jacquerie ……169
ジャバ Java ……29ff.,47, 399
ジャマイカ Jamaica ……73, 77
ジュスト・ウコン Dom Justo Ucon（高山右近友祥）……307, 314ff.,
330—3, 341ff.,345, 367, 369—72, 375ff.,388, 399
ジュリア（ヤ） Julia ……（大友宗麟新夫人）353, 355
……（内藤如安妹）388, 399
ジュリアン，ドン・ Dom Julian ……（内藤玄蕃）310（中浦）361
ジョアン João……（日本人イルマン）245, 350ff.,353—5
（岡山城主）315, 345（内藤如安） 306ff.,310, 388, 399
ジョアン一世 João I. ……31
ジョアン二世 João II. ……36—8, 67, 70
ジョアン三世 João III. ……56, 58, 60
ジョアン，ドン・ Dom João（一部）……274
ジョヴァンニ，マリニョリの Giovanni Marignolli ……30
ジョルジ Jorge（結城弥平治）……315, 345
ジョン（ジョヴァンニ），モンテコルヴイノの John of Monte Corvino …30

スコトウス・エリゲナ Scotus Erigena ……8, 194
スーザ，マルチン・アフォンソ・デ・ Martin Affonso de Sousa ……60
スピノラ Carl Spinola ……391
スペックス，ジャックス・ Jacques Specx……386
スマトラ Sumatra……29ff.,53
スルアン Suluan ……144
スンダ Sunda ……30
ズニガ（スニガ） Pedro de Zuniga ……389ff.

セイロン Ceylon ……29ff., 47
セウタ Ceuta ……31
セケイラ，ゴンサロ・デ・ Gonzalo de Sequeira ……51, 146
セケイラ，ディオゴ・ロペス・デ・ Diogo Lopez de Sequeira ……51, 56
セスペデス Gregorio de Cespedes ……347, 366, 370, 378
セネカ Seneca ……63
セネガル Senegal ……34
セバスチアン，ドン・ Dom Sebastian（大友親家）……348ff., 353
セビリャ（セビーヤ） Sevilla ……6, 9, 70, 140ff.
セブ Zebu, Cebu……145, 152
セラノ，フアン・ Juan Serrano……81, 145
セラン，フランシスコ・ Francisco Serrão……58. 140

セルカーク，アレキサンダー・ Alexander Selkirk……153
セルケイラ Luis de Cerqueira ……382, 384ff., 387
セルヂュック Seljuk, Seldschuk ……11
セレベス Celebes……150
センテノ Centeno ……138
セント・ヘレナ湾 St. Helena B. ……37
ゼーランヂャ Zeelandia ……397

ソコトラ Sokotra ……29, 47ff., 54
ソテロ，ルイス・ Luis Sotelo ……387
ソデリニ Soderini ……77
ソト，フェルナンド（エルナンド）・デ・ Fernando (Hernando) de Soto
……81, 124, 126ff.,132ff.
ソファラ Sofala ……38ff.
ソリス，フアン・ディアス・デ・ Juan Dias de Solis ……139ff.,142
ソロモン諸島 Solomon Is. ……153ff.

タ

タイラー，ワット・ Wat Tyler ……169
タカメス Tacamez ……102
タバスコ Tabasco……85ff.
タラウト Talaut ……148
タンピコ Tampico……85
ダイー（アイー），ピエール・ Pierre d'Ailly (Petrus de Alliaco) ……63ff.
ダヴァネ Davané ……39
ダギアル，ホルヘ・ Jorge d'Aguiar……49
ダブール Dabul ……49
ダマスクス Damascus……4, 6
ダミヤン Damião（日本人イルマン）……220, 240, 243,
……245, 256, 266ff., 280, 337, 355, 379
ダリエン Darien ……78ff., 81ff., 84, 123
ダリヨ Dario（高山図書頭 飛騨守）……285ff., 289, 306ff.,
……309ff., 314ff., 326ff., 330, 332ff., 344ff.
ダルカセヴァ，ペドロ・ Pedro d'Alcaceva……201—5, 207
ダルブケルケ d'Albuquerque アルブケルケを見よ
ダルメイダ d'Almeida アルメイダを見よ
ダンテ Dante ……13, 16ff.

チェーザレ・ボルヂア Cesare Borgia ……16
チチカカ Titicaca ……107ff., 116, 138
チチメーク Chichimek ……87, 89
チパング Cippangu ジパングを見よ
チモル Timor ……146

グレゴリウス　Gregorius ……5
グレゴリヨ　Gregorio ……341
グレート・フィッシュ河　Great Fish, R. ……37, 146
グローティウス　Hugo Grotius ……401
グァテマラ　Guatemala ……89, 98, 135
グァナハ　Guanaja ……77

ケツァルコアトゥル　Quetzalcoatl ……88ff., 91—4
ケルン　Köln ……14

コークバッカー　Nicolaes Couckebacker ……398
コスタ，バルタサル・ダ・　Baltasar da Costa ……252ff., 255, 271, 274, 279
コスモ，コスメ　Cosmo, Cosme ……（日本人イルマン）286, 319, 322, 337, 378（少年）300（京都の信者）313
コータン　Khotan ……28
コチン　Cochin ……44, 56, 147, 256
コペルニクス，ニコラス・Nicolas Copernicus ……154ff.
コリエンテス岬　Cabo das Corrientes ……39
コルテス，フェルナンド・　Fernando Cortes ……85ff., 89—99 ……123, 135, 139, 144ff., 149ff., 152
コルディレラ　Cordillera ……104, 108, 125
コルドバ　Cordova ……6, 9, 68
コロナド，フランシスコ・バスケス・　Francisco Vasques Coronado ……81
コロンブス，クリストフォルス・　Christophorus Columbus …… 17, 29, 30, 38, 62—4, 66—78, 80
コロンブス，ディエゴ・Diego Columbus ……73
コロンブス，バルトロメー・　Bartolome Columbus ……74ff.
コロンボ　Colombo ……56
コンゴー　Congo ……37
コンスタンチヌス　Constantinus ……5
コンスタンチノープル　Constantinopolis ……4
ゴア　Goa …… 50, 58, 155, 168, 182, 207, 261, 380
ゴート族　Gote, Goths ……3
ゴベヤ，ベルトラメウ・デ・　Bertlameu de Gouvea ……252, 254
ゴメス，エステバン・　Esteban Gomez ……143
ゴメス，ディオゴ・　Diogo Gomez ……34
ゴメス，フェルナン・　Fernão Gomez ……36
ゴルゴナ　Gorgona ……104, 123
ゴンサルベス　Jacome Gonsalvez ……251, 271

サ

サグレス　Sagres …… 31ff., 159
サバナス　Sabanas ……80

サーベドラ，アルバロ・デ・　Alvaro de Saavedra ……149, 152
サマル　Samar ……144, 150
サマルカンド　Samarkand ……6
サムパヨ，ロポ・ヴァス・デ・　Lopo Vas de Sampayo ……56
サラド　Salado ……31
サラマンカ　Salamanca ……67, 85, 99, 137
サルセット　Salsette ……57ff.
サルミエント，ペドロ・　Pedro Sarmiento ……111, 153
サン・ヴィセンテ　São Vicente ……31, 63
サン・クリストバル　San Cristoval ……153
サン・サルバドル　San Salvador ……70
サン・セバスチアン　San Sebastian ……79
サンタ・カタリナ　Santa Catalina ……252ff.
サンタ・クルス　Santa Cruz ……（所）143（諸島）154（船）252ff., 271
サンタ・フェのパウロ　Paulo de Santa Fé（ヤジロー）……182
サンタ・マリア・デル・アンティガ　Santa Maria del Antigua ……79—81, 83
サンチェズ，アイレス・Ayres Sanchez ……249, 278
サンチャゴ　Santiago ……（キュバの）85（河）135（チリーの）153（カリフォルニアの）153
サン・チャゴ島　São Thiago ……146
サンチョ　Sancho（三箇城主）……268ff.
サンヂル島　Sangir I. ……148
サントアンヂェル，ルイース・デ・　Luis de Sant-Angel ……68
サント・ドミンゴ・　Santo Domingo ……75, 77, 79
サン・フアン河　San Juan, R. ……101, 121
サン・フェリペ　San Felipe（船）……381
サン・マテオ湾　San Mateo, G. ……102, 123
サン・ミゲル　San Miguel（ペルー最初の植民地）……124ff., 132
サン・ミゲル湾　San Miguel, G. ……80
サン・ラザロ諸島　San Lazaro Is. ……144
ザイトン　Zayton　刺洞　泉州 ……28ff., 65, 70
ザンジバル　Zanzibar ……29
ザンベジ　Zambezi ……39

シェラ・レオネ　Sierra Leone ……34, 36
シマン，ドン・　Dom Simão（田原親虎）……350—2, 355, 358
シメアン（シマン）　Simeão（Simão）（池田丹後）……316ff., 324ff., 345
シャビエル，フランシスコ・デ・　Francisco de Xavier ……60ff., 138, 155, 168, 176, 180—90, 201ff., 207, 211ff., 215, 238ff., 261, 279, 320, 336, 354ff., 366, 379
シャム　Siam ……28, 53, 167, 393, 398ff.
シルヴァ（シルバ），ドワルテ・ダ・　Duarte de Sylva …… ……201—3, 205, 208—10, 214, 234, 252

オルガンチノ　Organtino Gnecchi-Soldi……
300, 302, 304—6, 308, 315, 319—24, 327, 329, 331, 334, 336, 338ff., 341ff., 344ff., 347, 366ff., 369ff., 377ff.
オルムヅ　Ormuz……28ff., 48., 55ff., 58
オレリャナ　Orellana……139
オレンヂ公　Prince of Orange　モーリッツを見よ

カ

カイロ　Kairo, Cairo……6, 30, 36, 52
カウーテモ（ガテモ）　Quauhtemo, Guatemo……97
カガヤン　Cagayan……146
カサス，ラス・　Las Casas……137, 139
カシュガル　Kaschgar, Kashgar……28
カステイレ　Castile……10, 78, 104
カストロ，バカ・デ・　Vaca de Castro……136
カタイ　Cathay……65, 72
カタロニア　Catalonia……9ff.
カッスタ　Kassuta……37
カディス　Cadiz……74
カナノル　Cannanor……43—5
カナリー群島　Canary Is.……68, 72
カノ，セバスチアン・デル・　Sebastian del Cano……146
カハマルカ　Cajamarca……122, 125, 131
カブラル，ジョアン・　João Cabral……252—5, 271, 273ff., 278
カブラル，フランシスコ・　Francisco Cabral……
……281, 283, 300, 304—7, 317, 337, 348—58
カブラル，ペドラルヴァレス・　Pedro Alvarez Cabral……43ff.
カボ・ヴェルデ　Cabo Verde……34, 146
カボ・トルメントソ　Cabo Tormentoso……37ff.
カボ・ブランコ　Cabo Blanco……34
カラコルム　Karakorum, Karahorum　和林……27
カリカット　Calicut……37, 40
カリフォルニア湾　California, G.……99
カリブ海　Caribbean S.……75
カリャオ　Callao……153
カリヤン　Francisco Carrião……367
カルキサノ，マルチン・イリギエス・デ・　Martin Irriguiez de Carquisano……148
カルバリョ，ロペス・デ・　Lopes de Carvalho……145ff.
カール・マルテル　Karl Martell……4
カールリ　Carli……119
カルロス一世（カール五世）　Carlos I. Karl V.…83, 94, 123, 138, 142, 149, 151
カレタ　Careta……80, 82

カロリン諸島　Caroline Is.……149ff., 154
カン，ディオゴ・　Diogo Cão……36
カンディア，ペドロ・デ・　Pedro de Candia……106
カンネス，ギル・　Gil Cannes……33
カンバヤ　Kambaya, Cambay……52
カンボヂヤ　Cambodia……398
ガゴ，バルテザル・　Baltesar Gago…… 201—3, 209, 211—3, 216—9, 232
ガスカ，ペドロ・デ・　Pedro de Gasca……137ff.
ガスナ　Ghasna……6
ガマ　Gama　バスコ・ダ・ガマ，ヅアルテ・ダ・ガマを見よ
ガムビア　Gambia……34, 36
ガヤキル　Guayaquil……104
ガラシヤ　Gracia（細川忠興夫人）……377ff.
ガリェゴ，エルナン・　Hernan Gallego……153
ガリレイ　Galilei……155, 401
ガルベス　Francisco Galves……390
ガロ（ガリヨ）　Gallo……103ff.
ガン　Ghent……14

キトー　Quito……81, 115, 121—3, 133, 135—9
キボラ　Cibola（ニューメキシコ地名）……81
キュバ　Cuba……70ff., 84ff., 90, 96
キロア（キルワ）　Kiloa, Kilwa……39, 46
キンザイ（キンサイ）　Quinsai, Kinsay, Khinzai（行在）……28—30, 65, 70
キンタ　Quinta（大友親家夫人）……353
ギネア　Guanaja, Ganaja, Ginia, Guinea……31, 36
ギリエルメ　Guilherme Pereira……219, 234
ギルバート諸島　Gilbert Is.……144

クィビラ　Quivira（ネブラスカ地名）……81
クエリヨ　Nicolo Coelho……42
クエリヨ，ガスパル・　Gaspar Coelho……337, 364, 366, 371—7, 379, 385
クスコ　Cuzco……108, 125, 131ff., 134—6
クティニョ，フェルナン・　Fernão Coutinho……50
クーニャ，ヌンニョ・ダ・　Nuño da Cunha……56—8, 60
クビライ　Khubilai, Keblai　勿必烈……20, 28
クラカ　Curaca……105, 109, 120, 124
クラカウ　Cracow……155
クローヴィス　Clovis, Chlodovech, Chlodwig……5
グヂェラート　Gudjerat, Guzerat, Gudscharat……47, 49, 52, 56ff.
グラナダ　Granada……6, 10, 68（ニカラグヮの）83
グリハルバ，エルナンド・　Ernand Grijalva……150
グリハルバ，フアン・デ・　Juan de Grijalva……85

アリストテレース　Aristoteles ……6ff.,12ff.,33, 62—4, 66
アルガルヴェ　Algarve ……31
アルキム　Arquim ……34
アル・キンディ　Al Kindi, Alcindus, Alchindi ……6
アルゴア湾　Algoa B. ……37
アルゼンチン　Argentine ……139
アルバラド，アロンソ・デ・　Alonso de Alvarado ……138
アルバラド，ペドロ・デ・　Pedro de Alvarado ……135
アルバレズ，ジョルジ・Jorge Alvarrez ……168, 181ff.
アルブケルケ，アフォンソ・デ・　Affonso d'Albuquerque ……45, 47—56, 58ff, 78, 140, 165, 167
アルブケルケ，フランシスコ・デ・　Francisco d'Albuquerque ……45
アルベルガリア，ロポ・ソアレス・デ・　Lopo Soarez d'Albergaria ……55
アルベルトゥス・マグヌス　Albertus Magnus ……12ff., 17, 33
アルマグロ，ディエゴ・　Diego Almagro ……(父) 81, 100—4. (子)136ff
アルメイダ，ドン・ペドロ・デ・Dom Pedro d'Almeida …248, 250, 252ff., 271
アルメイダ，フラスシスコ・デ・　Francisco d'Almeida ……46ff.,59, 140, 165
アルメイダ，ルイス・デ・　Luis d'Almeida ……213ff., 218, 231ff., 234—43, 250—2, 254ff., 258ff., 262ff,, 271—84, 355, 379
アレシャンドレ　Alexandre（京都の信者）……313
アンセルムス　Anselmus ……8
アンゼリス　Girolamo de Angelis ……390
アンタン　Antão（結城左衛門）265,（京都の信者）……313
アンダゴーヤ，パスクァル・デ・　Pascual de Andagoya ……81, 99
アンダマン　Andaman ……29
アンヂェディヴ　Andjedive ……46
アンティリア　Antilia ……63, 65
アンティル諸島　The Antilles ……72
アントニオ　Antonio（日本人イルマン）……267, 337
アントニオ，ドン・　Dom Antonio（籠手田）……218, 272—4, 277
アントワープ　Antwerp ……14
アンドレー　Andre（山口人）……353
アンボイナ　Amboina ……58, 151

イサベラ　Isabela ……67ff.,77
イサベル　Ysabel ……153
イシュタッチワトル　Jxtaccihuatl, Jztaccihuatl ……86
イスタッラパン　Istallapan ……95
イスパハン　Ispahan ……6ff.
イスラ・リカ　Isla rica ……82
イノホサ　Hinojosa ……138
イブン・トファイル　Ibn Tofail, Tophail, Abubacer ……7
インカ　Inca ……105ff.

インノセント四世　Innocent IV. ……27

ウィクリフ　Wyclif ……169
ウィツィロポチトリ　Huitzilopochtli ……88
ウェルバ　Huelva ……67
ウドン　Udong ……398
ウラバ　Uraba ……78ff.
ウルサン　Ouru-San ……399
ウルダネタ，アンドレアス・　Andreas Urdaneta ……150—2
ヴァスコゴンセルロス　Diogo Mendes de Vascogoncellos ……51
ヴァルテマ，ルドヴィコ・ディ・　Ludovico di Varthema ……47
ヴァンダル　Vandal ……5
ヴィセンテ，マルチン・Martin Vicente ……67
ヴェスプッチ，アメリゴ・　Amerigo Vespucci, Americus Vespuccius ……71, 75—8.,139
ヴェネチア　Venezia ……14,16
ヴォルガ　Volga ……28

エウゲニウス　Eugenius IV. ……65
エスキベル，フアン・デ・　Juan de Esquivel ……71
エストゥレマドゥラ　Estremadura ……85, 99
エスピノーザ　Espinoza ……82ff.
エチオピア　Etiopia ……32
エルヴァス　Élvas ……148
エルナンデス，ガルチア・　Garcia Hernandes ……68
エルナンデス・デ・コルドバ　Hernandes de Cordova ……83ff.
エンシソ，マルチン・フェルナンデス・デ・　Martin Fernandez de Enciso ……78—81, 123

オアシャカ　Oaxsaca ……98
オセス，デ・　Francisco de Hóces ……148
オデリコ，ポルデノーネの・　Oderico da Pordenone ……30
オトゥンバ　Otumba ……95
オドアケル　Odoacer, Odwaker ……3
オノル　Onor ……46
オバンド，ニコラス・デ・　Nicolas de Ovando ……75, 85
オビエド，ゴンザロ・フェルナンデス・デ・　Gonzalo Fernandez de Oviedo ……81
オフィル　Ophir ……73ff.,153
オヘダ，アロンゾ・デ・Alonso de Hojeda ……71, 73, 76, 80
オマイヤ　Omaiya, Umaiya ……4, 6, 9
オマーン　Oman ……48
オリノコ　Orinoco ……74

和辻哲郎（わつじ　てつろう）

1889年　兵庫県に生れる
1912年　東京帝国大学文学部哲学科卒
1960年12月26日歿
著書――『和辻哲郎全集』全20巻（岩波書店刊）がある

鎖　国　　筑摩叢書 22

昭和39年 5 月25日 発行

¥ 620

著　者　和辻哲郎
発行者　古田晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町 2 の 8
電話 東京（291）7651番（代表）
振替 東京 4123番

©1964

三晃印刷・鈴木製本

人名地名索引

《原語との対照表を兼ねカナ書き人名地名をのみ掲ぐ》

ア

アイスランド　Iceland ……63
アウグスチヌス　Augustinus ……5
アヴィチェンナ　Avicenna, Ibu Sîna ……7ff.,12ff.
アヴィニヨン　Avignon ……15
アヴェロニス　Averrhoes ……7ff.,12ff.,64, 66
アヴェンパチェ　Avempace, Abu Bekr, Ibu Bâdja ……7
アカプルコ　Acapulco ……152
アコスタ　José de Acosta ……118
アゴスチニョ　Agostinho……（日本人少年）243,（小西行長）368
アーサ王　King Arthur……11
アステーク　Aztek ……86ff., 97
アストゥリアス　Asturias ……10
アゾレス諸島　The Azores……63, 70, 72, 74
アタカマ　Atacama ……121, 135
アタワルパ　Atahuallpa ……121ff.,126ff.
アダムス，ウィリアム・　William Adams……386
アディル・シャー　Adil Schah ……50
アデン　Aden ……30, 55
アナワク　Anahuac ……87ff.
アッバス　Abbas ……6
アビシニア　Abyssinia ……29ff.
アビラ　Avila　ペドラリアスを見よ
アフォンソ五世　Affonso V. ……36
アブル・ハッサン　Abul Hassan……31
アマゾン　Amazon ……136, 139
アマルフィ　Amalfi……14
アムステルダム島　Amsterdam I. ……146
アメリゴ　Amerigo, Americus　ヴェスプッチを見よ
アユチヤ　Ayuthia ……398
アラゴン　Aragon ……9
アラミノス，アントニオ・デ・　Antonio de Alaminos……84
アラリック　Alaric ……5
アランダ，フアン・デ・　Juan de Aranda……140
アリウス　Arius ……3

1 萩原朔太郎　三好達治

朔太郎との最初の邂逅から四十年、「地上に存在した無二の詩人」として、いまなお敬愛を捧げる著者が、二十余年にわたって発表した論文・随想から自選、世に問う、朔太郎論の決定版。／¥三五〇

2 西洋の美術　井手則雄

原始時代からフランス革命まで――西洋美術の発展過程を、社会の進歩に照応して平明に説く。多彩な美術への鑑賞眼を開かせてくれる好著である。口絵写真八ページ、本文写真八十数葉。／¥三五〇

3 戦後文学の回想　中村真一郎

第一次戦後派として清新な文学風土を切り開いてきた著者が、豊かな交遊記録を織りまぜながら、戦後の文学運動に対して独自の視点から照明を与え今後の方向をも浮彫りした力作である。／¥二九〇

4 人間最後の言葉　C・アヴリーヌ　河盛好蔵訳

人は死に直面してはじめて赤裸なまことの姿をあらわす。古今の有名人が死にのぞむ言葉を渉猟した本書は、生きることの尊さと死のもつ意味を考えさせる、すぐれた人間省察の書である。／¥四二〇

5 正法眼蔵随聞記　水野弥穂子訳

道元禅師に参侍した懐弉の歴史的名著。底本に最も古い姿をとどめる長円寺本を選び、原文対訳と懇切な解説によって道元の教えの真諦を現代の人にわかりやすく伝える労作。増谷文雄解説／¥四五〇

6 千利休　唐木順三

悲劇的最期をとげた利休は、いまなお日本の生活文化の中に生きている。本書は、利休の生涯を世阿弥、芭蕉のそれと比較し、時の権力と結びついた利休芸術の真諦を追究した名著である。／¥三二〇

7 大正文学史　臼井吉見

多端な大正期の社会思潮的な推移の中に、成熟期にある明治の作家と、新たに登場する大正の作家たちの多様な活動と性格を跡づけ、この期文学の史的再評価を行なった労作。年表・索引付／¥三八〇

8 わが心の遍歴　長與善郎

一千枚におよぶ本格的自伝文学。名門長與家の歴史、古い時代の上流社会の生活、思想的文学的な交友などを回顧し、大胆率直に自己の成長の跡をくもりない筆致で活写した。安倍能成解説／¥四五〇

9 明治文学史　中村光夫

前近代から近代への目覚め、その文学的開花と対立など、はげしく変動した明治期の時代と文学を鋭利な分析と透徹した理解力をもって論証しつつ、併せて近代文学の持つ病根を剔抉する。／¥三八〇

10 モンテーニュ・エセー　原二郎選訳

柔軟自在な眼で自己を直視し、普遍的人間性を洞察して、近代批評精神の先駆的存在となった十六世紀フランス・モラリストの名著。ぼう大な〈エセー〉を一巻に精選した。落合太郎解説　／¥三八〇

11 論語　武内義雄訳注

訳者六十年の攻究の成果を結集して成った権威ある訳注書。何晏の集解をもととして、原文、読下し文を左右対照に配し、異同を注記した。巻末に孔子の生涯とその思想を述べた解題を付す。／¥三八〇

12 ニッポン日記　マーク・ゲイン　井本威夫訳

特派記者の眼がとらえた日本占領の驚くべき実態。日米の重要資料をもとに憲法改正をはじめ、戦後の大変革の内幕を抉り、今日の日本の姿を予見した、戦後史に残るベストセラーの新版。／¥五二〇

13 新版 現代史への試み　唐木順三

不徹底な近代化による歪められた日本の「現代」を分析して、問題の所在に展望と方向をあたえ、新しい世界観による人間性の回復を探究した論著。旧版を改編して、あらためて世に問う。／¥三八〇

14 わが古典鑑賞　小島政二郎

短編小説の祖「堤中納言物語」、女の愛と悲しみを静かな筆づかいに託した、「かげろふの日記」、「大鏡」「落窪物語」「今昔物語」の特色ある王朝の五作品の鑑賞に独自の境地をひらく名著。／¥三五〇

15 昭和文学史　平野謙

初期の社会的不安から軍国主義的支配体制の確立、敗戦によるその崩壊と混乱など、めまぐるしく変転した昭和期文学の特性を究明して新たなる解明と展望を行なった力篇。年表・索引付。／¥四八〇

16 東西の美術　B・ローランド　八代修次、高橋巌、海津忠雄訳

〈比較美術学入門〉著者はハーヴァード大学美術史教授。東洋と西洋の美術を広い視野と独自の問題提起の下に採り上げ、図版を対照に配して明快に論考し、新しい解釈の可能性を開く。　／¥四二〇

筑摩書房

¥620